

層富

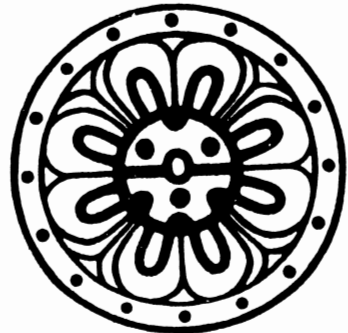
(川口勇書)

会誌名「層富」(そほ・そふ)の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「曾布」「添」とも記され、「倭六県」(やまとのりくのあがた)の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春二月壬辰朔辛亥(20日)の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌の名としました。ご愛顧の程を。(網干善教)



会章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ、単純な円形にまとめ、音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも、二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

(基本デザイン 朱雀・寛裕)



第二十号 目次 二〇〇三年

巻頭言……………	網干 善教	1
記念講演		
最近飛鳥で出土した暦の木簡……………	網干 善教	2
漢詩……………	片桐 一夫	5
私の歩んだ道(わが半世紀) 「すかたん近衛兵」嘆き節(二)……………	繪内 正久	6
俳句……………		
天津甘栗と狗不理包子……………	松村 如洋	26
英語第二公用語論について……………	吉田 治正	28
芸術のお話(続)……………	梶野 哲	33
現代詩……………	大野 貞男	40
短歌……………		
グループからの便り……………		
第二十回文化祭記録……………		
二〇〇三年総会記録……………		
会則……………		
役員名簿・組織名簿・会員名簿……………		

◆表紙写真は、赤坐右一氏からいただきました。お礼申し上げます。

会員の皆様へ

会長 網干善教

会員の皆様の御協力、とりわけ、編集に携わって下さいました方々の御尽力によりまして、会報『層富』の刊行ができました。拝読してありますと皆様の御協力、あるいは趣味の広さ、深さ、をありありと感じるところです。

活々と、楽しくという人間にとって、極めて大切な働きをもって下さっていることを嬉しく思います。

中国の『孟子』という本の中に、「帰りにて之を求めば余師あらん」という言葉があります。

ふり返ってよく考え、あたりを見ると、自分が学ぶことのできる友達や先輩がたくさんいる。人生のなかで、そういう人に出逢うことが大切で、周辺にいっぱい居られ、そういう人に出逢うことが有意義な人生を営むことができるということです。

文化協会もそういう会でありたいと思います。一人でも生活はできるかも知れませんが、良き先輩をもったり、友人と交ったりすることが大切なのです。

今後共、文化協会に御協力をお願いします。

最近飛鳥で出土した暦の木簡

関西大学名誉教授 網 干 善 教

平成十五年二月二十七日付の新聞は、奈良県明日香村にありました旧飛鳥小学校の北側で発掘調査されている石神遺跡から飛鳥時代に使用されていた暦（こよみ）が出土し、それが「元嘉暦」であって、「国内最古のカレンダー」「現物発見は世界初」といった見出しで大々的に報道されました。

暦は私たちの生活に重要なものです。古代からも使用されていましたがその仕組がむつかしいのです。

この暦の木簡は、もとは一辺約四〇cm、厚さ約一・四cm位の長方形の板に書かれていたものですが、それが不用になったので、再利用するため、直径約一〇cmほどの円板状に切り、中央に穴をあけて使用していたものだと思います。そうしたことから、もとの板に書かれていた暦の一部が

残っており、それを読んでいつ使われていた暦かを調べてみたところ、持統天皇三年（六八九）の三月（表）と四月（裏）の暦であることが分ったということです。しかもその暦には日付と、十二直といわれるその日の吉凶を表わした文字がみられます。またその下に「暦注」といって、その日の行動が吉であるか凶であるかの事項、あるいは今日は上玄であるとか三月節であるとか書いてあります。このような暦を「具注暦」と呼んでいます。例えば「今日は殺生などで血をとまなうことは凶」とか「倉を開くことは吉」といった類であります。

古代の暦について『日本書紀』をみますと持統天皇四年（六九〇）十一月甲申（十一日）の条に「勅を奉りて、始めて元嘉暦と儀鳳暦を行う」とあります。元嘉暦とは

中国の南朝（その頃中国は南朝と北朝に分かれていた）の宋の文帝の元嘉二十二年（四四五）に編纂され、飛鳥時代の初め頃（七世紀のはじめ）に日本に伝えられたといわれています。

一方、儀鳳曆とは、唐の麟徳二年（六六五）日本では天智天皇四年にあたる）に新しく制定された曆で麟徳曆ともいわれています。ところで、明日香村の石神遺跡で出土しましたこの曆の木簡は、持統天皇三年三月、四月であり、公式に元嘉曆と儀鳳曆が併用されるのは持統天皇四年十一月でありますから、持統天皇三年の時は元嘉曆であったこととなります。したがって、この曆の木簡は日本では儀鳳曆より前の元嘉曆であるから「国内最古のカレンダー」となるのです。日本で儀鳳曆のみとなるのは少しあとの文武天皇以後であるといわれています。もう一つ重要なことは、今回、この石神遺跡から他に大量の木簡が出土していることあります。その木簡の干支をみますと、天智天皇四年（六六五）や天武天皇七年（六七八）から十四年（六八五）のものが中心で、なかには持統天皇四年（六九〇）までのものがあります。これは主に各地から贄（にえ）と呼ばれる地方の産物が

送られてきた品物の荷札で、今回出土の木簡をみると静岡県伊豆から魚、今の鳥取市あたりからは日干しの鮎、隠岐島からはコノシロ（ニシンの一種）などがあります。また地域別にみると三野国（美濃国＝岐阜県）からのものが多いのです。このようなことからみると飛鳥の宮廷では各地から貢上された山海の珍味を食べていたことが分かります。

それはそれとして、木簡の年号から次のような問題が生じます。新聞論調をみると、石神遺跡について「飛鳥時代の迎賓館跡とされる奈良県明日香村の石神遺跡」とか「石神遺跡はもともと、女帝・斉明天皇時代の迎賓館と考えられていた。しかし、最近の発掘調査ではその後の天武朝でも朝廷の施設として使われたことが判明、どのような性格の施設か不明だが、周辺には官衛（古代の役所）があったことが推定されている」とていった記事が見られます。

さらに、今回出土した木簡の中に「御垣守」と書いたものがあり、これが「官殿を囲んだ大垣や門などの警備にあたった兵士のこと」として、「天武天皇が構えた飛鳥浄御原宮がこの石神付近と考えられ、発掘現場には蔽

重に守られた同宮の関連施設があった可能性が想像される」とあります。

今回、石神遺跡で出土した木簡は天武・持統天皇朝の記事が多いとされます。天武・持統天皇の宮はいうまでもなく飛鳥浄御原宮でありました。

そういえば、五十年ほど前に飛鳥小学校があった校舎の北側に十米平方ほどの堀り込みがあり、そのところに敷石のような遺構が見えていた。その傍に、確か「飛鳥浄御原宮跡」と書いた標柱がたてられていたことを思い出します。

岩波書店発行の日本文学大系の『日本書紀 下』にある「飛鳥浄御原宮」の頭注をみると「所在地は奈良県高市郡明日香村飛鳥の北方か」とあります。木簡の出土した石神遺跡はまさしく大字飛鳥の北方にあたり、ここが飛鳥浄御原宮であったとの推定地です。そこから天武・持統天皇時代の木簡が出土したということになるのです。

ところが明日香村役場北側の大井戸跡のところが以前は「飛鳥板蓋宮伝承地」といわれてきました。発掘調査がすすむなかで大きく上下二層に分れた宮殿遺構が埋まっていることが知られるようになりました。また各地

点で出土する木簡も天武・持統朝のものが多くあることから最近では上層の宮殿遺構が浄御原宮である可能性が浮上し、現在ここに飛鳥浄御原宮があったと考える研究者が非常に多いのです。

そうすると浄御原宮は大字岡と大字飛鳥の北方という二箇所が想定されることとなります。しかし、浄御原宮がこの二箇所にあったとすることはできない。そこで、大字岡の方を浄御原宮のあったところとすると、石神は附属の宮殿のおかれたところと考えられる。附属とは主宮でなくて迎賓館のようなものが置かれていたのではない。そう考えなければ話の辻褄が合わなくなる。そこで「迎賓館のようなもの」と考えられるようになったと思われのです。

なお、ここから木簡関係のものが約一、〇〇〇点出土しているといわれています。これらの洗浄や解読がすすめば、もっといろいろなことが分ってくるだろう。そして飛鳥の遺跡が、飛鳥時代のこと具体的に知られるかもしれないという大きな期待が持たれています。

漢詩

キトラ古墳

世紀円墳様式俱

星辰壁画允欣愉

貴人哲学在天文

極点歳差移動図

桃花

陽炎庭前立女媧

夢中容姿正娃娃

究明易易天桃美

占断春光在此花

世紀の円墳

星辰の壁画は

貴人の哲学は

極点の歳差

様式の俱

欣愉を允す

天文に在り

移動の図

陽炎の庭前に

夢中の容姿は

究明易易たり

春光を占断す

立つ女媧

正に娃娃

天桃の美

是此の花

片桐一夫

すかたん近衛兵、嘆き節（二）

繪内正久

半世紀前までわが国の各家庭の奥座敷には、天皇とご家族が住む宮城の荘厳な正面写真が飾られていた。手前に玉砂利の広場、石橋とその奥の鉄橋のいわゆる二重橋、お濠の石垣の上に枝ぶりのいい松、奥に白壁の伏見櫓。その横に武蔵野原生の杜。しかし宮殿がどのあたりにあるのか、どんな建物か。その写真からうかがい知ることができない。また、それを知る国民も少ない。西欧の王宮と違って国民の目から、わざと遠ざけたようなわが国の宮殿だ。ペールで覆って宮殿の神秘と天皇の尊厳を維持したと思われるもしかたがない。その宮殿が突如戦火で焼滅した。その事実を知る国民はわずか。太平洋戦争敗戦三か月前、米軍機の空襲だった。その神秘のカーテンに閉ざされた宮殿を近衛兵たちは明治宮殿と呼んだ。敗戦の日まで私たちは宮城という聖域と宮殿という建物と、天皇ご一家をお守りし、かつ国民の目から遠ざ

ける役目を負っていた。それが禁闕守衛の任務と教えられていたからだ。

だから私たちは両陛下や皇族方のご動静、宮城内の地理、地形、建造物、できごとなど宮城内で知り得た秘事を除隊後も一生、父兄や恩師はもとより親類、知人、近隣にいつさい口外してはならぬと教育されてきた。しかし日本の軍隊が消滅し、情報公開が進む今日、五十余年前の近衛兵教育の鋼鉄の鎖は熔けたはずだ。いまはなき明治宮殿がなぜ、いかにして炎上したか、宮内省庁やその筋の関係者は黙して語ろうとしない。燃えつき倒れる宮殿を見つめていた私が、いま語ったとしても「すかたん」と認められようが非国民とそしられるいわれはもはやあるまい。わが国が明治維新後の弱小国から世界三大強国のひとつにのぼりつめた栄光の過去を知る宮殿の炎上は、ぜひ次世代へ語りつがねばならぬ歴史的大事件と

思う。誇張していえばそれは私の責務かもしれない。

さて、その明治宮殿が完成したのは明治二十一年。欽定憲法制定の前年である。桃山様式の外觀を見せた和式洋風の木造平屋建てだった。場所は坂下門から入って宮内庁前を左折、二重橋や宮中三殿へ向かう坂道の右側、例の写真の伏見櫓の右方と奥一帯である。昭和四十三年に造営された昭和宮殿と同じ場所で東本丸と西本丸の中間になる。戦時下のせいか表宮殿は清掃が行きとどかず、窓に爆風よけの紙テープをはりめぐらし建物全体が黒ずみ、ところどころに消防器材の格納箱が打ちつけられ防火水槽、非常ベルが散見、宮殿というより古ぼけた神社の感じだった。しかし内部の仕様は十九世紀西欧の豪華な様式を採用。両陛下や皇族、国賓、華族専用の鳳凰ノ間、桐ノ間、牡丹ノ間、千種ノ間など十余の控室、正殿や豊明殿はその名の由来するデザインのじゅうたん、カーテン、いす・テーブル、ソファなどの装飾家具、絵画・彫刻などの美術品、大鏡や大時計の超一級の調度品で飾られていた。

それだけに焼失した損害額は天文学的数字といわれ、

今日では再現不能という。この表宮殿に隣接して天皇ご

一家が居住される和風木造平屋建てのお住まいがあった。



縦一列に南面して天皇御常御殿、皇后御常御殿、皇太子、

内親王の御殿の順で建ち、その間に十坪ほどのささやかな庭があった。雑草が生い茂るにまかせ、花や野菜を栽培した様子もない。そんな野草が昭和天皇のお好みだった。各棟は一本の廊下で結ばれ、天皇御殿と皇后御殿の間を結ぶ廊下の片側は書庫を兼ね、背文字が金字のりっぱな本が見えた。建物自体は昭和の初めに建てられ、質素な庶民感覚の造りで皇太子（現天皇陛下）は学習院初等科の疎開で日光御用邸に移られ、内親王お三方も東本丸の呉竹寮に移って空き家だった。

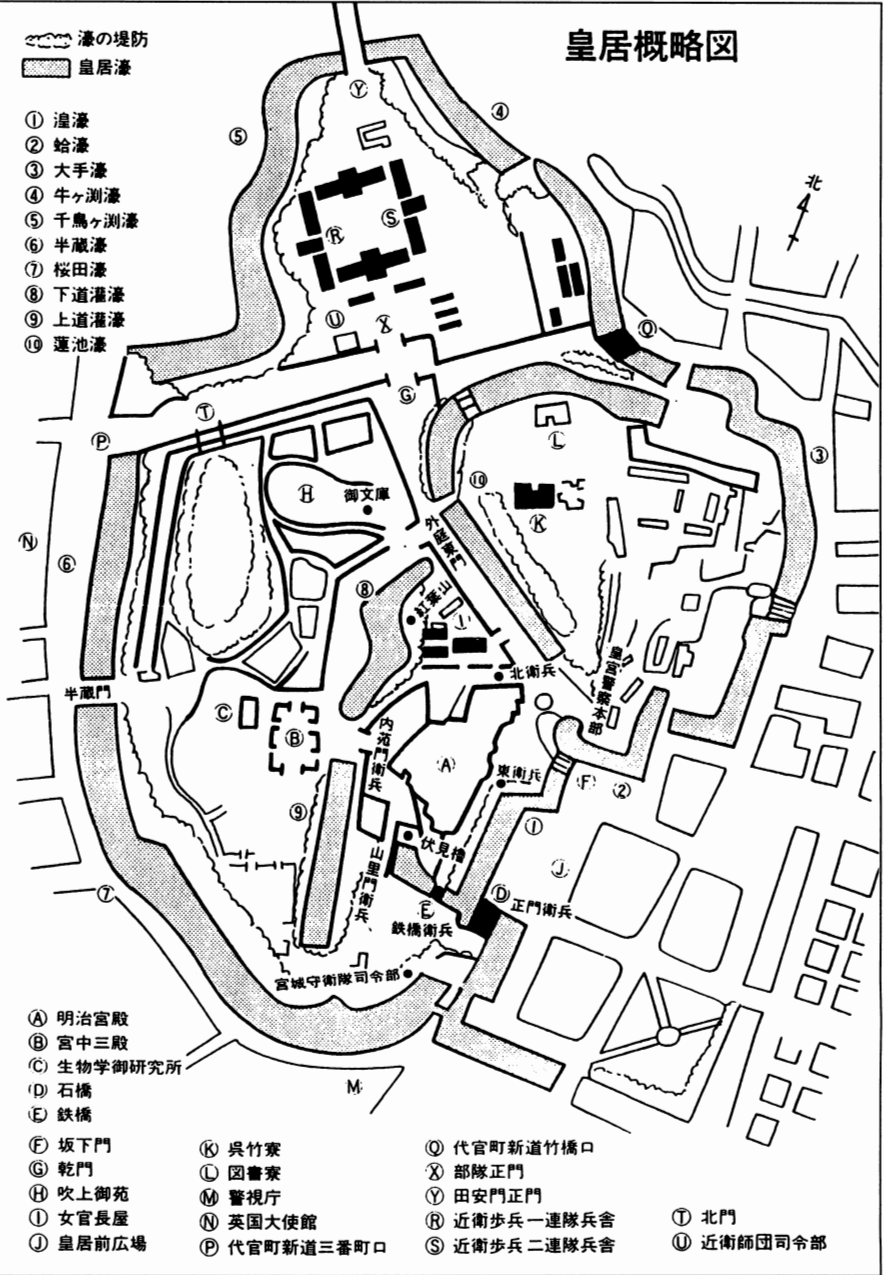
さすがに天皇御常御殿だけは京都御所の清涼殿に似た外形で平安御殿風。しかし屋根は桧皮葺きでなく緑青を全面にふいた青銅の板葺き。流れも優美な入母屋造りで、陽に映えた様子は神々しく息をのむばかり。西欧建築のドームの比ではない。私たち近衛兵は任務のため図上教育とともに実地教育として御殿を見学、守衛勤務に万全を期さねばならなかった。そのため宮内省に伺いをたて

両陛下ご不在の折を利用した。それにしても御常御殿を

皇居概略図

 濠の堤防
 皇居濠

- ① 滄濠
- ② 蛤濠
- ③ 大手濠
- ④ 牛ヶ測濠
- ⑤ 千鳥ヶ測濠
- ⑥ 半蔵濠
- ⑦ 桜田濠
- ⑧ 下道瀧濠
- ⑨ 上道瀧濠
- ⑩ 運池濠



- (A) 明治宮殿
- (B) 宮中三殿
- (C) 生物学御研究所
- (D) 石橋
- (E) 鉄橋
- (F) 坂下門
- (G) 乾門
- (H) 吹上御苑
- (I) 女官長屋
- (J) 皇居前広場
- (K) 呉竹寮
- (L) 図書寮
- (M) 警視庁
- (N) 英国大使館
- (P) 代官町新道三番町口
- (Q) 代官町新道竹橋口
- (X) 部隊正門
- (Y) 田安門正門
- (R) 近衛歩兵一連隊兵舎
- (S) 近衛歩兵二連隊兵舎
- (T) 北門
- (U) 近衛師団司令部

知る者は近衛兵と、おそば近くで日常のご用を勤める侍従と女官だけ。皇族、国賓、華族、大臣といえども絶対近づくことを許されない。まさに神の住む聖域中の聖域だった。終戦前年の秋、私がお伺いしたとき、南面のお

庭先から見て和室の二部屋の障子が開け放たれ、右側のお部屋の前にテーブルと二脚のいすが向かいあっておかれ、左側のお部屋に簡素な座り机が見えた。皇后御殿のお部屋には豪華な白塗りの大型ベッドがあった。なお御殿は表宮殿と廊下で結ばれ、その境に防火壁をかねた高塀があり、接するように天皇の御学問所があった。その隣に侍従や女官の控室があった。広い縁側の外に擬宝珠のついた欄干がめぐらされ、庭へおりる七段の階段。また縁側にはデパートのショウウィンドーほどの大きな素透しのガラス戸がはめこまれていた。床下はおとなが立って歩けるほどの高床だが、ねずみも入りこめない金網ばかり。コンクリートの大きな防火用水槽が二つ、バケツも添えてあった。

以上でおわかりのように明治宮殿は国事、儀式、謁見用の表宮殿と、ご一家の私生活の場の御常御殿を合わせた総称なのだ。今の昭和宮殿は国務行為のみに使われ、

陛下のお住まいは遠く離れて吹上御苑のなかに建つ。隣接した明治宮殿の側から、延焼を防ぐねらいを考慮したのかもしれない。そこで外国との戦争による初めての宮殿炎上に話を移そう。

昭和二十年五月二十五日午後十時半ごろ、前夜に続き今夜も東京都内に空襲警報の不気味なサイレンが鳴りわたった。この日宮城北の丸にある私たち近衛歩兵第二連隊第三大隊第九中隊の主力は二重橋正門の儀仗衛兵に上番して、中隊兵舎には私を含め二十人ほど兵隊が残留していた。同十一時二十三分、米機B29百五十機が数波にわかれて駿河湾から帝都上空に侵入してきた。そのころ、わが方の制空権は同年三月十日の大空襲で完全に米軍に襲われていた。前年十一月から始まった東京空襲当初は花々しく探照灯を照射し、一万トンの高空をゆくB29に射程距離が及ばず空しく落下するだけの八八式7輝野戦高射砲弾を浴びせ、目標も定まらずふらふらとのぼる高射機関銃まで動員したが片っぱしから空爆され、以後沈黙してしまった。今夜も迎撃のない東京上空にわがもの顔で焼夷弾、五百^キ爆弾を雨あられと投下、たちまち各所に火の手があがった。兵舎の窓から超低空で乱舞す

炎上した天皇御常御殿略図

内
苑
門
側

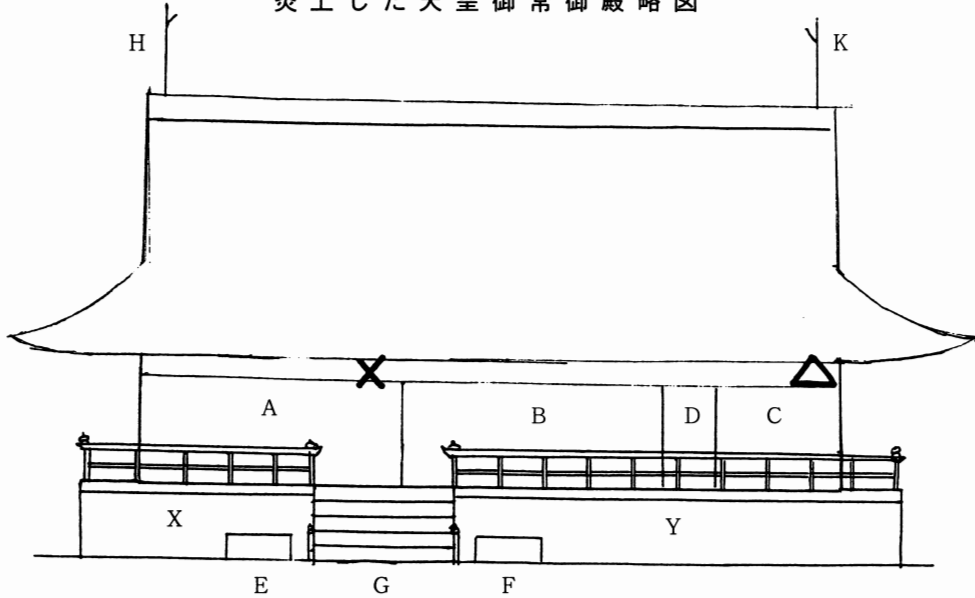


表
宮
殿
側

- | | | | | | |
|------|---------|------|-------|------|---------------|
| A, B | 天皇お居間 | E, F | 防火用水槽 | X | 飛び火による出火点 |
| C | 侍従、女官控室 | G | 階 段 | △ | 表宮殿から延焼による出火点 |
| D | 廊 下 | X, Y | 床 下 | H, K | 避雷針 |

る敵機を見れば、下界の紅蓮の炎を巨大な翼に映して地獄よりの使者火の鳥さながら。耳をつんざく爆音はぶきみなその鳴き声。落とす爆弾が空をきる鋭い摩擦音は逃げまどう都民の悲鳴ときこえた。

今夜の標的もすべて武器を持たない女、子ども、年よりばかり。燃えやすい木と紙でできた民家。人道主義もなにもない非戦闘員の無差別大量虐殺だった。戦時国際法の違反は明らか。米機は当初、わが対空陣地、軍施設、軍需工場をねらい、撲滅したあとは婦女子、高齢者だけの民家に焼夷弾を浴びせて退路を断って殲滅する作戦に転じた。その最大が二十年三月十日の陸軍記念日空襲だった。深川、下谷だけで一夜にして死者八万以上にのぼった。世界戦史上、短時間に大量殺戮が行われた記録として未だに破られていない。しかも今日にいたるまで犠牲者は救済されず、名簿もできてない。ついでだが今年三月、米英軍の対イラク戦では民家の誤爆、民間人数人の死亡でさえ非難の声が世界中に起きているのに、広島、長崎の原爆投下にさえ乏しい世界の関心に複雑な感情を抱く日本人も多かろう。さて話をもとにもどし近衛兵は全国徴募のため東京都内出身兵はほとんどなく、親類縁

者を持つものも少なくこんどは海軍記念日の五月二十七日あたりがねらわれるぞと無責任に話し合っていたのが的中した。空爆目標も麴町、築地方向と見ていた。まずいことにこの夜は台風なみの風速25メートルを越える関東名物のからっ風が吹き荒れていた。

しばらくすると週番士官が私を求めて走りより「山階宮邸の派遣隊がもどってこん 安否を確かめてくれ」

大声の命令にさっそく兵隊をかき集めてまさにおっとり刀。連隊正門の徳川三卿ゆかりの田安門を走りぬけ、千鳥ヶ淵と牛ヶ淵のお濠にはさまれた正門通りを、向かいの靖国神社めがけてかけおりた。九段坂上の電車通りは一面火の海。赤と黄色の火を放ってなぜか道路だけが燃えている。電車通りを渡って靖国神社の境内に入らねば宮邸へは行けぬ。創設以来わが軍隊では上官の命令は即朕（天皇陛下）の命令、絶対服従だ。従わなければ軍法会議が待っている。ひょつとして今夜限りの命かとかばあきらめ

「渡るぞっ」とひと声。

隊員たちの手前、弱みは見せられんと率先燃える車道

に片脚をふみこんだ。とたんに素足を火中につっこんだような痛みが頭につきささる。たまらず片足を浮かせてあたりの様子をうかがえば、燃えてないすき間があった。木製のれんがが舗装に流しこんだアスファルトとともにぶすぶす燃えている。しめたと燃えてない所に飛び移り、子どもの石けり遊びの要領であっちへ飛びこっちへ跳ね、滑りそうになったりどうにか横断に成功した。

それを見て安心したのか、たたずんでいた仲間の連中も宇治川の先陣争いよろしく後になり先になり、火のない所を目ざして飛びはねつつ全員無事神社境内へ駆けこんだ。やれやれと思つたのも束の間、吸いこむ空気が急に燃えるような熱さ。目の前が真っ赤。鉄かぶとが焼けている。あわてて地面に伏せ匍匐前進の要領で夢中で境内を駆けつ炎のトンネルをくぐった。どのくらい走つたものか頭が涼しくなって顔をあげると、炎がうそのように消え、静かな暗夜が迎えてくれた。そのとたん、連中は大声をあげ、笑い合い肩をたたいて喜びあっていた。命拾いしてうれしかったのだろう。それから四十数年後、元二連隊の全国総会で見知らぬ老人に「お前が靖国神社の手水鉢の水や防火用水の水を頭からかけてくれたので、

おれたちは助かった」と感謝された。自分にそんな勇気や義侠心があるとは知らなかった。人違いだろうといつたが相手は承知しない。あの炎は社殿の屋根と境内の榎木が燃えていたのだという。

山階宮邸の派遣隊員調査を終えて帰宮の途についたとき空襲警報は解除となり、日付けも二十六日午前〇時半前後に改まっていた。舎前にたどり着いた私たちを認めるや、駆け出てきた週番士官が

「いま宮城が燃えとる そのまま急いで行けッ」と金切り声。そのとたん、いっしょに帰ってきた連中がとびあがるようにして一瞬のうちに闇のなかに消えてしまった。命令復唱や駆け足の号令どころか、私ひとりごとが残されてしまった。しかたなく彼らを追って第一連隊側の正門に行くと、地だんだをふんで待っている様子。第一連隊と第二連隊は宮城北の丸に駐屯して、田安門が二連隊の、バッキンガム宮殿風のしゃれた鉄柵門が一連隊の正門だ。田安門は靖国神社に、鉄柵門は宮城乾門みやぎけんもんに相對している。それで第二連隊が御守衛勤務の上下番には第一連隊の正門を利用していた。指揮者がいないので連中は、足止めを食っていたわけだ。だが肅然と整列して



江戸時代の九段坂

手前の濠が牛ヶ渚
左上方が鳥ヶ渚
その間の横道は田安門道

北斎画く「九段牛がぶち」

歩調も高らかに乾門をくぐるや、再び私の命令もきかばこそ、たちまち姿をかき消してしまった。軍紀厳正なる近衛兵の面影はまったくない。まるで敵前逃亡をはかったように、クモの子を散らしてしまった連中を百万坪の宮城内で探すことは不可能だ。処置なしと私は、坂下門に通じる蓮池濠沿いの宮城一の大通り蓮池通りから外庭がらてい東門ちどもとへ走り、内苑門をすりぬけ、天皇御常御殿の横手から大勢の人声がする庭先へかけこんだ。五百坪を超えるお庭先には宮内省消防隊や兵隊でごったがえし、表宮殿の火勢の火明かりの中で叫んだり、走り回っていた。

なぜ連中が私を捨てて走りさってしまったか。考えてみればむりもない。彼らはいずれも三、四年兵の上等兵や兵長ばかりで、ぱりぱりの現役の近衛兵だ。軍律も軍紀も私以上に精通している。禁闕守衛の本務は先に述べた宮城と宮殿の保守であり、そのなかには火災予防、早期発見と消火、暴漢の侵入防止、逮捕が含まれる。火災の発見の遅れや処置の不手際など大火を招いたときは、宸襟を悩まし奉ったということで、当該場所の衛兵ばかりか宮城全域の警備責任者である宮城守衛隊司令官（大隊長）、担当地域の衛兵司令（中隊長）以下当日上番の

全衛兵が責任を負い、所属連隊長、近衛師団長、陸軍大臣も一連托生で上にあがるほど重い処罰を受けると守衛教育で教えられてきた。そのため上番将兵は万一のおわびに備え、ふんどしにいたるまで新しい下着をつけ自決用にそなえていた。その責任感から不可抗力の事件といえども、事故の責任とする観念が徹底していた。だから連中たちは上番中のわが中隊の処分と運命を考えて、少しでも被害を小さくおさえようと、われ先に走りだした戦友愛のあらわれだった。

お庭先は消火や物品搬出、救援にかけつけた兵隊たちで、芋の子を洗うようななかを、ひとみをこらしても見知った顔はなく、一連隊の兵士もかけつけてきた。表宮殿の屋根からあがる炎がかすかに顔を照らす。万事休す。このままでは守衛隊司令官に応援隊到着を報告できない。（おれ一人が出頭して応援隊到着。全員行方不明と報告すれば部下の掌握不十分とどなられるのがオチだ。ここは一番、このお庭先で手柄をたてねば……そうすれば後で詰問されてもきりぬけられる）。とっさに判断した。見れば天皇御殿の中に大勢むらがっている。（これだ）。人波をかきわけて御殿の階段に近づいた。そのとき左側

のお居間の天井付近が急に明るくなって火をふいた。部屋の人波が崩れた。どっと階段へむらがり落ちてきた。

ほかの部屋に火の手は見えない。飛び火だ。階段下にとりついた私も押されて横へ逃げた。逃げざまふり向くと火は炎のかたまりに広がった。部屋の中はあかあかとして逃げまどう人びとを映していた。見る間に火勢がました。しかし消火の水をかけている様子がない。消防隊は庭の中ほどにかたまって、かけつけようとしなない。ホースを手にするものもない地面は水浸しだった。

思わずなにかにつまづいた。白い布ぎれだった。足にからまる布端しを手にして部屋の火勢にすかして見れば女性の洋服地だった。純白の布地のあちこちに泥土が付着し、水でも浴びたかびしょぬれだ。すその長いロングドレスで女性の礼装ではないのか。そういえば昨秋だったか、靖国神社ご参拝の皇后さま（香淳皇后）が召された白衣の礼装とそっくり。モントラントブランとかいったように新聞記事にあったのを思いだした。（たいへんなものを手にしてしまった。どうしよう……）胸もつぶれる思いだった。とにかく国母陛下が御身につけられた御物に違いないと直感した。宮内省消防隊か兵隊が暗がり

のお部屋の中から手あたり次第にひっぱりだして、御殿の欄干から地上めがけて投げたか、抱えて運ぶ途中で落としたものだろう。そのうえ物品運び出しや消火活動の人たちが、それと気づかず手荒らく扱い、土足にかけ、

引きずったりしたのだろう。しっとりとした柔かく滑るような感触の生地だった。ごつごつしたもめんの兵隊服になじんだ手に、これが絹の手ざわりかと思わず胸がはずんだ。（このまま捨てておいてはだめだ……；また、

みんなが土足で踏みつけたり、けとばしてひきさいてしまいかもしれない……）。どこか安全な場所へと決心した私は、小わきに抱えて山里門やまざともんの方へ走りだした。しかし十歩ほど走ったところで、また足もとにからまるものがあった。ふんわりした布地の感じが軍靴をへだてて伝わってきた。黒いものだ。びしょぬれだった。男ものの背広のようだ。やっぱり洋服だった。取りあげると、すそが長く伸びて先が二つに大きく割れていた。燕尾服と見た。あたりを見回すと三、四メートル先にこの燕尾服のものと思われるズボンが投げだされていた。腰のあたりが裏返しで裏地が見え、すそがよじれている。天皇お召しの礼装と直感した。これもお居間から運び出す途中で落

としたに違いない。搬出した本人は、ドレスと同様にこれが何かとも考える余裕とてなく、無我夢中でほかのものといっしょにかき集めて運んでいたのだろう。女性ものについて男性ものの礼装。天皇御殿の前の広庭で拾いあげた以上は、お付きの人のものでなく、両陛下の晴れの日に召される御衣にまちがいないと確信した。同時に大きな衝撃をうけた。(どうして私のようなもの手に……)

小学校以来、祝祭日には御眞影を奉戴し、教育勅語に頭をたれ、国旗を仰ぎ、皇国史観のただなかで育ってきた私にとり、現人神が御身につけられた神衣を気安く手に持つなどもってのほか。私にとってまさに驚天動地の大事件だ。皇室関係の記事がのる新聞紙を踏んだり、あやまって包み紙や鼻紙などに使ってさえ当時は、目がつぶれ手足が腐って神罰と恐れられたものだった。すかたんとはいえ、その呪縛から自由ではありえない。

捧げる両手が緊張でふるえた。(人けのない静かな安全なところへ……) お庭の南端、伏見櫓に近い築山のあたりが思いうかんだ。急ぐ途中で白磁の飯茶わん二つが転がっていた。大ぶりと小ぶりで無地のようだった。(御物の夫婦茶わん?……今夜もお使いになったのか)

お二人の礼装を抱えつつ、そんなことを考えていた。

(よく割れずに……) あたりは大きなもの小さなもの、

箱に入ったもの、布で包んだらしいもの、長持ちか、足の踏み場もないほど散乱し、うち捨てられていた。男もの短靴もあった。これも陛下のものかと考えた。なだらかな小山をかけあがって、頂上近くにあった灌木の根

かたにそっとおろして形を整えた。すがすがしい気分だった。心も落ちついてお庭を眺める余裕がでてきた。二つのお居間の天井から火を噴いているが、まだお部屋全体に燃え広がっていないようだ。青銅の大屋根は凜として黒い影を大空に描いていた。表宮殿はいまを盛りと火の粉をふきあげ、夜空をまっ赤に焦がしていた。火勢のうなる音、何かはじける音、人声が一つになって大内山をゆるがす。強風まで悲鳴をあげているようだ。先ほど夜

目にもくつきり目に入った白磁のお茶わんを求めて小山をおりた。お二人だけでお自ら茶わんにご飯を盛り召しあがっておられたのか。あるいは女官が給仕していたのだろうか。火急の場合におかしなことが頭に浮かぶ。やはり陛下のお食事は宮内庁大膳寮で調理される。宮城に上番中の近衛兵の食事も同じ大膳寮でつくられる。食

事当番の兵たちは、一日三食の主食と副食を受領に行くついでに、隣りあった陛下用の大きなまな板の上ののった食材を見て、その日の陛下の召しあがりものを知った。連隊で食べる兵食よりはるかに上等で、選りぬかれた料理人の調理だけに高級料亭の趣きがある。連隊では高粱米だが上番中は白米になる。下士以上はアルミ食器でなく一般家庭のように陶磁器の皿小鉢に盛られた。陛下のお食事も当然陶磁器だろう。しかしあの茶わんは、近衛兵用であるはずはあるまい。陛下のお居間にあった御物に違いない。のんきなことを考えていた。だが方向をまちがえたか人波をくぐって探したが見つからない。だれかが足蹴にしてこわさなければよいが、と思った。なぜか消火用のホースがあちこちにうち捨てられているのが、また気がかりになった。消防隊員たちは疲れきったのか、動作が鈍くなつてしゃがみこんだり、ぼんやり立っている様子だ。そんな連中から少し離れて、長方形の木箱が捨てられていた。折からの風で箱の中の紙片が舞いあがり、目の前に落ちてきた。元へもどそうと拾いあげ、何げなく見ると赤インキで三重丸がうってあった。学校の答案用紙かと思いつつながめると、「良子女王」とたど

たどしい鉛筆書きの漢字四文字が目飛び込んできた。二年生の国語の試験とあった。

（皇后さまの御名ではないか）、とたんに百雷が一時に襲ったほど驚いた。頭から足の先へ強烈な電気が走りぬけた。久邇宮良子^{ながこ}内親王殿下が学習院初等科に通われたご精進を物語る試験答案だ。それがむきだしで散らばっている。（一般の目にふれさせてはならぬ）。なぜか気負い立ち風を追い回し、皇后の答案用紙ぜんぶで十枚ほどをとり返した。算術もあれば書き取り、綴り方も。高学年になるほどご署名の字体の優美さと上品さが悪筆の私にもよくわかった。作文にしても「私の家族」という題があった。読んではならぬと心に誓いつつ走り見したがある日の宮邸での両親の宮、兄妹の宮との睦まじいお話をうかがいさげなく、庶民と同じことばで綴られ火事場のさなか深い感銘を受けた。それらの用紙には三重丸や四重丸、ときには担任教師の感想らしいことばも書きこまれていた。百点満点は目にできなかつたが、どれも九十点以上だった。その木箱は高さ四〇^{センチ}ほど、長さ六〇^{センチ}、幅三〇^{センチ}ほど。高等科の分まですべて収納されたに違いないと思つた。

山階宮邸から引揚げ、宮城火災の救援を命ぜられたものの仲間の兵隊に逃げられ、天皇御常御殿の広庭にただ一人かけこんで長い時間がたったような気がするが、短いようにも思えた。しかしいろいろの驚くべきこと、戦前なら恐懼感激ということばの連続だった。平時ではたとえ宮城内にあって勤務中といえども絶対生まれるはずのない経験だった。感激の一方、呆然とした思いで燃える御殿を見つめた。御常御殿に火がついたのは、表宮殿の炎が廊下の天井裏を伝って一気に御殿の天井を走って左端のお居間の上にとりついて、火を噴いたのではないかとぼんやりした頭で判断した。表宮殿の天井裏は学校の体育館ほど広い。明治の建物なので防火壁はなかった。自由に立ってどこまでも走れる。もちろん防火用水は天井裏の要所に置いてあった。敵機来襲の警戒警報発令と同時に近衛の防火隊がかけあがり、警戒する手はずだった。おそらくその広い天井が災いして風の通り道となり、一挙に御殿の天井を末端のお部屋まで走ったのだろう。火事場記者をやった経験だった。

お庭に満ちた人びとの動きが、さっきよりまた一段と鈍くなっていた。立ちつくしたままで多くは御常御殿の

方を眺めている。消火隊や兵隊も今はお居間に入れず、手持ちぶさたに見えた。放水筒をつけたままの消火ホースまで投げだされている。人びとの足もとでとぐるを巻き、長く延びたものも。水が無いのだと、やっと気がついた。今なら助かるかもしれない御殿を目の前に、消防隊がホースを向けないはずはない。そうだ水が無いのだ。敵の焼夷弾で都内各所に火の手があがり、そのいっせい放水でついに水位が低下、宮城に水が回ってこなくなったのだ。桜田門、丸の内にくらべ御殿は高さ数十メートルの武蔵台地上にある。戦時下というのに政府も宮内省も、宮城空襲に備えた防火施設を何もしてなかったことに気がついた。明治時代のままの態勢で、政治家も軍部も役人も宮城炎上などあるはずない、と考えていたに違いない。大失態ではないか。間抜けな話とひとり憤慨した。ぼんやり御殿を見あげる群れのなかに、海軍軍人のような制服を着た侍従の一団が見えた。腕ぐみしたり、ポケットに手をつっこんだまま立っている。その傍らにモンペ姿の老女の一団があった。女官たちだ。胸に手をあて、しゃがみこんだ人もいる。居ても立ってもいられない気持ちなのだろう。

いつの間にか応召前の火事場記者の気持ちになつてた。世紀の大事事件の一部終始をこの目にしっかり焼きつけておこう。(いつか公表できるときのために……)。表宮殿の方の火はやや鎮まったように見えた。そっちの様子はどうなってるだろう。見に行こう。きびすをかえして山里門へむかった。内苑門の方は人ごみで近よれない。しばらく歩くと足もとに光るものがあった。茶筒だ。高さ十五センチほどのかわいらしい銀色の金属製だった。ふたをあけたとたん、香ばしいかき餅の香りが鼻をついた。さいころほどに小さく刻んだあられだった。煎りたてのように、あたり一面に香りが広がった。思わず腹が鳴った。幼いとき、父の郷里から送ってきて以来、久しぶりでかくなつかしい香りだった。(しめた、あとでゆっくり食べよう……) 食い意地の前に礼節も愛国心もない。とにかく食糧不足で本ものの味などめったにあじわえない。純粹のかき餅なんてまさに貴重品なのだ。すばやく兵服の軍袴の隠しにねじこんだ。

ふたの表面に菊の御紋章の毛彫りがあるのを、ちらつと認めたが両陛下の御衣や皇后さまの答案用紙と違い、食べ物にすぎないと恐れる気さえ生まれずただ喜びには

ずんだ。そのとき人波がざわつく気配がした。頭をあげると表宮殿寄りの御常御殿の軒あたりから凍ったような青白い炎がふいている。間もなく黄色の火に変わった。見る見る広がる。緑の炎があがった。夜空に抽象画の大きなキャンパスが出現した。世紀日本の象徴のひとつ皇居に衝撃の痛恨事がこれから起きるとは、お庭に立ちつくしただれもまだ気づいてなかった。

というより神の国の至尊のお住まいが夷狄の汚火に負けるはずない、と固く信じきっているように見えた。今は燃えていてもいずれ神意で消える。そんな神頼みの気が聖城内で高揚され、悲劇的結末を考えまいとしている。両陛下はいつものように警報発令と同時に、御殿から十分ほどの吹上御苑内の御文庫ごぶんこにお移りになったはずだ。御文庫は近衛一、二連隊、工兵隊だけで宮内省にも伝えず極秘に築いた要塞なみの建造物。地上一階地下二階、一ト爆弾にも耐える。お二人の居間、御璽などを安置する次の間、お子様の部屋、浴室、食堂、皇族と重臣の二つの会議室が。終戦のご決断もこの御文庫の地下会議室だった。(どのようなお気持ちでおすごしか……) ずかたんの私も燃える宮城の夜空を神妙にながめていた。

俳句

力溜め立つ

牧野和代

縞つよし杖つく人に冬の蜂
はんなりと大佛裏の雪螢
障害者窓口ポインセチアかな
薄氷の底より静かなる息吹き
薄氷や応へて動く紅き鱒
水鳥へ百歩あゆめり少し坂
朝寝して酢漬に赤き唐辛子
裏戸出る女ゆらぎぬ青蜜柑
爽やかにゼンマイ時計うたひをり
足裏に力溜め立つ帰燕かな

新緑

遠見近見新緑香る舟下り

鱚雲単線海と岐れゆく

存問に友老いて立つ菊日和

青年の村菓立ち行く三月尽

一村の梅ほころびて俄か茶屋

麻生利子

初便り

枯葉散る街悠々と修行僧

枯木立つ東尋坊の崖つぶち

墨の香を封じて来たり初便り

藤村の詩集片手に青き踏む

駐在所裏は大根の花ざかり

上田善次

笑ひ初

金屏に雛の影の並びをり

御門跡佇てる花壇の冬桜

待ってるし如くに走り出す蜥蜴

曾孫まだ言葉を知らず笑ひ初め

鷗外の門の奥より孕み鹿

伊藤柳紅

伴侶

春深し余生の伴侶俳句とし

梅固し男結びの解き難し

冷やかな水こそ甘し疲れるて

秋燈下ペン皿に筆混み合ひて

一人住み冬夜にひびく古時計

上田千代子

夏わらび

岡 良子

風に乗り宇宙旅行のしゃぼん玉
万葉の歌碑の丘みち夏わらび
はかどらぬ出句に悩む木の葉髪
束ね出す賀状ポストの底に音
酒蔵の梁黒光り白障子

牡蠣船

込山山歩

太閤が遺せし山号実梅落つ
論戦はそれまでとして泥鰌鍋
牡蠣船を舫ひてここは淀屋橋
部戸をあげて障子の浄瑠璃寺
霰つちふるや千年耐へし邪鬼の肩

庭園灯

周藤智子

梅雨曇ホークもナイフも不得手なる
毒だみの鉄錆いろに干されたる
秋の夜巢立ちたる娘の本開らく
庭園灯点きしままなり冬木立
初鏡卒寿の顔をなでにけり

九月来る

多田文子

春愁を母に残して娘の去ぬる
轉りや背よりはみ出すランドセル
夫の法事を終へてはや九月来る
淋し氣に揺れて紅葉の散りにけり
押入を開けて寒気をかぶりけり

指切り

辻 田 しま代

この席のゆずる気はなし紅葉狩

指切りは何の約束山笑ふ

紅梅に人居るかとも空家とも

佛具屋の代替りして竹の春

この寒さ帽子被りて昼飼とる

秋 蝶

南 村 照 栄

秋蝶の影神泉を渡りゆく

裸木に金星大きくまたたけり

赤児抱くやうに頂く冬菜かな

陵の鷺の欠伸や小春かな

少年の面ざしとなり滝の前

コスモス

西 田 たまみ

巢燕やきのうに変わる雨の音

白桃の包みはみ出す匂ひかな

素っ気なく男秋刀魚を買ひにけり

コスモスや鏡の中に風生まる

珈琲の香りふつつつ寒の朝

草 朧

西 山 佐代子

弓始め風をはらみて矢を放つ

草朧傘引きづりて子等帰る

ぼうたんを活けて客間を明るふす

金木犀垣に沿ひたるこぼれ花

武蔵野に冬菜育てて店を守る

歳時記

浜 本 るり子

春 水

藤 澤 陽 子

燈下親し父の歳時記譲り受け

所在なく黄昏どきの唐辛子

こだわりのあれば冬帽深々と

涸池に大河のごとき流れあり

柿落葉かさこそ庭であそびをり

指先のすこし桃色春水

軽やかに子は素足なり雪の朝

凍蝶や五十二段のなかほほどに

春めきて寡黙な夫の大欠伸

海からの風の届きし菓箱かな

『朱雀門』

藤 井 よし治

日脚伸ぶ

堀 池 敏 子

鳥威し孫の喜ぶ顔のあり

明易に遠来の客待ち申す

鬼やらい孫の打つ豆鼻を打つ

たっぷりと秋水つかふ小さき墓

琴の音を聞きつつ昼餉初ざくら

黒兔毛の艶やかに抱かれけり

かぎろひて昔を語る朱雀門

眠る山より芳かくはしき生気かな

診察の順を待つ間の日向ぼこ

寺町をそぞろ歩みて日脚伸ぶ

谷若葉

村上俊子

せせらぎや身ぬち染めゆく谷若葉

紫のけぶると見しは花櫛あうち

木犀のほろほろ零れつつ匂ふ

野の祠野の草そなへ神の留守

返信の春は名のみと書きにけり

沈丁花

森田陽子

簪のゆるる振袖年賀かな

レッスンは甘き恋歌春隣

十六夜の月レモン色春の宵

停年の目に大根の花白き

沈丁花句座のまどるに香り来る



天津甘栗と狗不理包子^{コウブリイバオズ}

松村如洋

天津は奈良の西方、渤海湾に面した北京、上海と並ぶ中央直轄市の一つ、北京の玄関口として港が設けられ、物資の中継地として栄えた。北京から車で高速道路を走ると、約二時間で天津に着く。広い道路が延び、ゆったりとした町並みが広がる。周恩来総理が青年時代この天津で活躍し、現在、立派な記念館が建てられている。愛用の飛行機、自動車、様々な資料などが展示され、その偉大な業績が一目でわかる。さらに世界で三番目に高いテレビ塔が聳え、明、清時代の町並みを復元した古文化街が中国独特の雰囲気を漂わせている。年画や泥人形など特産の民芸品を売る店が軒を連ね、毎日がお祭りのような賑やかさである。

天津が世界に誇る特産品は多数有るが、私達になじみ深い特産品といえば、先ず天津甘栗が頭にうかぶ。栗の腹を爪で割り、両端を強く押すとポカッと割れてコロコ

ロとした栗の実が出てくる。食べ始めると止められない。でも皆さん、天津には山がなく、栗が採れないのをご存知ですか。天津で栗が採れないのに何故天津甘栗？実は他地方で採れた栗が天津港に集められ、日本に輸出されていたのです。地元より、日本で有名になり、今では日本などのスーパーでも売っている。更に、食の街天津の名所として知られている南市食品街では、有名な「狗不理包子」を食べられる。日本でいう天津包子（肉まん）で、大きさは半分くらい、そのおいしさは比べものにならない。「狗不理」とは「犬も相手にしない」という意味で、頑固だった創業者のあだ名からとったもの。袁世凱が西太后に献上してから、中国全土で一躍有名になった。特に南部の長江下流域では至る所で「本物の天津狗不理包子」といって売っているが、やはり味のほうは本物と全く違うらしい。○二年六月、天津対外友好協会の

招待で狗不理の店に行った。鳥居のような中国独特の真っ赤な門があり、黒地に金文字で「狗不理」と書いた額が掛かっていた。建物は四合院風のコの字型で、灯笼（ランタン）等で飾られた中庭を通り、エレベーターで3階に上ると赤い絨毯を敷き詰めた、カーテン越しに薄日が差し込む静かな部屋に案内された。会談後、宴会場の円いテーブルに着くと次々にご馳走が並べられた。乾杯が終わると、恥ずかしさもどこえやら、楽しみにしていた「狗不理包子」に真っ先に箸をつけた。白くほかほかして、パクッと一口かぶりつくと、中から熱いスープが飛び出し、ジュッと口一杯に広がる。しばしそのまろやかな味と香りを楽しんだ。美しい女性達が奏でる二胡や琵琶などの心地よい調べを耳にしながら、天津のすばらしい料理を味わえるとは何と幸せなのだろう。天津の人達が「狗不理包子」を天津名物と言って自慢するのもうなずける。

故郷を愛するのは中国人の伝統的な美德のひとつであるが、天津人は自らの故郷を「この世の楽園」と思っている。よく言われる「住は杭州、衣は蘇州、食は広州」ではなく、正確には「生活するのは天津、着るものも天

津、食べるのも天津」で、中国の何処と比べても天津はど良い所は他にはないと言う。確かに食べものは工夫が凝らされておいしい、服装もしゃれていて美しく、若者達はさっそうと街を歩いている。また、天津人は自分の故郷を愛する思いがことのほか深く、地元で少しでも活路があれば天津を離れようとしない。

天津ではこんな昔話が語り継がれている。「鼓樓の下に小さな金の豚が群れで住んでいた。天津人は毎晩その小さな金の豚達が鼓樓から走り出てくるのを見ていた。天津人は小さな金の豚達が毎晩地上を一回りした後、跡形もなく姿を消してしまうのをただじっと見ているだけだった。彼らは小さな金の豚達に出てくる所、帰る場所が有るなら自分の家に連れて行くべきでないと思っていた。ところが、南からやって来た南蛮人が小さな金の豚の群れを見ると、わずかな豚の餌で小さな金の豚を全部家に連れて帰り、大もうけをした。天津人はよそ者が自分の家の宝物を取り込んで行くのを悔しそうに眺めているだけだった。」

この昔話は天津人の性格を良く現していると思う。小さな金の豚達を優しく大切に見守り、自分の金儲けのた

めに捕まえて売りとはしたりしない。このような故郷をこよなく愛する思いやり深い人達に囲まれ、「狗不理包子」を味わいながら安らかな日々を送ることができる。天津の人達が自慢するように、天津はまさに「この世の

楽園」と言えるのではないのでしょうか。「天津甘栗」もそんな楽園からやってきていたのです。参考；（林希：「宝地天津卫」、中国人的性格与文化、二〇〇二年）

英語第二公用語論について

吉田 治 正

私は平成二年三月、奈良市右京の住民になった。富山県砺波の生まれ育ちで、奈良県以外の七都道府県に勤務したが、大阪勤めが長かったので、若い頃から憧れていた日本の歴史・文化の古里、大和の国に、判事定年を期として住むことができた。

お誘いを受けて平成十二年、平城ニュータウン文化協会に入会し、網干先生の歴史教養講座を聴講し、渡邊さん、清水さんがお世話くださる続日本紀を読む会に出席して教えを受けている。注意力散漫、居眠りし易く、耳も少し遠い老人なので、平成十三年から歴史教養講座で

は最前列に座るよう心掛けた。これが目立ち昨年四月協会誌層富の編集委員から寄稿を求められた。困った末来年寄稿しますと逃げたものの研究事項も趣味もなく、小学校の綴方以来作文が苦手の私は適切な題材も見つけないで来た。しかし約束は守らなければならないので高説紹介を主にした駄文を寄せる。

奈良に住んで、この大和の国が主要な舞台になる考古・歴史の話を碩学の網干先生や、「読む会」の先達から毎月無料で聞かせていただく。大気が清く風致に富んだ

ニュータウンを毎日散歩する。そして公園や家々丹精の花々・木の実を四季を通じて次々と愛で、特に親しい方や WELCOME TO MY GARDEN など、と表示下さるお宅には覗き込みを許してもらう。大池があり桜が咲き水鳥が遊ぶ四号公園、花木と紅葉に美しい第二団地を巡り、時には里山の風光が残り巨木に数千の鶴の子柿が美しい神功陵までの津風呂の道を楽しむ。

右京小学校の用務員さんは、朝早くから校庭を清掃し藤棚の花を見事に咲かせ、兎飼育の児童らに懇切な指導を続ける。

平城西中学校の用務員さんは、長い土堤のきつい草刈り花壇の手入れ等にまめまめしく励み、挨拶すると感謝の念で働いている声が返ってくる。

このニュータウンに住んで十三年、私と家内は奈良に住んで良かったと語り合っている。しかしながら日本国のこととなると、先が案じられ暗い思いにさせられることが多い。

私は英語を第二公用語とする論を聞いたとき、日本の将来を案じての提言であるが、疑問があり賛成し難いと思つた。

公用語になれば、法律その他あらゆる公的文書はすべて英語と二重表記しなければならない。英語を国民生活一般に通用させることになる。そして義務教育で全児童生徒が英語を通用語として理解・使用できるように教え込まねばならない。家庭と日常生活に密着しない英語をそこまで教え込むことは僅かな授業時間で済むことではあるまい。

日本の学生・生徒の国語学力は低下してきているといわれる。日本は文明諸外国比べて義務教育における自国語への授業時間数が少ないと指摘されている。その中で週五日制・ゆとり教育といつて日本語・算数の時間を減らした。これに対しそれらの基礎学力すら身につけていない多くの児童・生徒・そして学生を続出させていると指摘批判されている。

見識の高い人の中には、英語に精通していても、重要な話では必ず通訳を入れて、自らは母語で話す人があるという。人は母語によって思考発想するからということだ。

経済界で活躍した今は亡き先輩から、日本語がしっかりと出来ない者は英語を話すことができるようになって

も貧弱な英語表現しかできない、と聞いた。

英語を第二公用語とすることは、結局義務教育において、英語の授業を割り込ませることで、英語・日本語・算数いずれの基礎学力も身につけないより多数の児童・生徒を作り出すのではないか、日本国の将来を誤ることになるのではないか、と思つてきた。

旧臘十二月、大野晋著の日本語の教室（岩波新書）を読んだ。

本書は日本語に関する九つのさまざまな質問に答える第一部と、日本語と日本の文明・その過去と将来についての七質問に答える第二部からなっている。

大野先生の著作にこれまでいろいろ教えられてきたがこの新書も名著だと感心しつつ読み進んだ。最終の質問十六に対する応答中の二二四頁になると「日本語の問題を考へるときに英語教育をどうするのかという問いが必ず出て来る」とした上、二二七頁までの間に大略次のように述べられている。

英語は、世界の共通語の位置を獲得しつつある。

世界を相手に商業を営み、世界に通じる学問を研究しそれを読み、書き、意見を交換するには英語の能力は必ず要求される。

英語の学習はそれを選択する生徒・学生に対して現在より強化される必要がある。

だからといって英語を第二公用語とするという論は誤っていると思う。

文部科学省の提案を見ると、それは日本語を低く粗略に扱うことと平行して進んでいる。ゆとり教育と称し、算数・日本語の時間を減らし、それでいながら英語を幼児期から教える方がいいなどとすすめている。それは古来、文明をすべて輸入品に頼って生きて来た日本人の陥りやすい安易な発想です。

しかし明治時代の日本を切り拓いた人々を見ると、彼らはまず日本語ができた。漢文、その訓読の文章の理解もできた。そして彼らが読んでいた、こなしていたヨーロッパ語の文献のリストを見ると、戦後の大学生のヨーロッパ語学習のなまぬるさと能力の低さには目を蔽いたくなる。

そして今や文部科学省が母語である日本語自体の学習

を軽んじている。

文部科学省は、もっと言語教育について、誰に對しても日本語の鍛練を強化するように、英語についてはその履修を選ぶ学生が確実に学べるように、双方ともに現在の倍の時間を割く体制を作るべきである。そのためには割愛すべき科目もあると思う。

人間は母語によって思考する。母語の習得の精密化・深化をはかることなくして何で文明に立ち向かうことができよう。母語によって客観的世界を出来る限り精しく理解し、母語よって的確明晰に表現できる力を養わないで、外国語をうまく使おうとしても可能であるはずはない。母語がよく使いこなせなければ、漱石のいう「上皮」だけしか見ない、「上皮」のことしか言えない日本人に成り果てるほかはないでしょう、と。

私は卓見であると感じし賛成したが、大野先生は国語学者であるので、英語・英文学者の意見も聴きたくなかった。

そこで旧制中学校同級生で尊敬する友人である英語・英文学者・東京大学名誉教授の平野敬一君に手紙で質問

をした。平野返書は次の如くであった。

大野晋氏の日本語（及び英語）についての所説は、きわめて真つ当だと思つています。

ごく例外的少数者を除いて、人間は母語でしか発想しない（というよりできない）ものです。（母語外の）英語をペラペラ口に行っているように見える人も英語で発想している訳ではない。と私は自分の体験からも断言できそうです。

英語を第二公用語に、というのは馬鹿げた議論で、実現不可能というだけでなく、せつかくの母語の感覚を荒廃させるだけだと思つています。

私は若いころ、カナダの大学で英語教育のお手伝いをしたことがあります、その際痛感させられたことの一つは、英語国の教育で、いかに自国語である English が重視されているかということだった。

英語がいわば人文教育の中枢をなし、大学の教官構成でも English Department が断然、他を圧して重きをなしていたのです。日本の大学教育で日本語（国語）教育がどういう位置を占めているのか——実態は無きに等し

いと言ってもよさそう——カナダ人に英語を教えながら
絶えず考えさせられたものです。

イギリスやアメリカの大学教育においても英語が占め
るウエイトが大きいことがはっきり分かりました。小学
校から大学に至るまで外国語教育をおろそかにする点で
は日本以上の国はちょっとないのではなからうか、と。

右は小学校教育をカナダで受けて家族と共に帰国し、
東大の学生、教官として英文学を専攻し、四十歳ころカ
ナダの大学で客員助教授として、カナダ文学を講じ、英
作文を教え、ロビンソンクルーソー、マザーグース等を
訳出し、長く東大教授、日本カナダ文学会会長を勤めた英
語に精通した、日本語が母語の 優れた英語・英文学者
の教示である。

それは体験と思索に基づいた率直、明快で説得力のあ
る意見である。

私は、

義務教育では、目新しいことを追ったり、各科目総花
的にして教えるのではなく、基礎・基本となる科目・事
項の学習に重点を置くべきである。

文部科学省は、母語である日本語の学習を重んじ、す
べての児童生徒に対し日本語の修得を深化させ鍛練を強
化するよう、十分な学習時間を割り当てる体制を作るべ
きである。

英語については、その履修を選ぶ生徒・学生が確実に
学べるような体制を工夫して欲しい。

英語を第二公用語にする政策を採ってはならない、と
考える。

芸術のお話 (続)

梶野 哲

芸術と生活

私たちは生まれた時から、芸術に囲まれ、芸術活動を行い芸術を作りながら、一緒に、生活してきたのです。

赤ちゃんの時、ベット・メリー・ゴードランドを見たり、

ガラガラを振ったり、子守歌を聞きました。幼児期にはおもちゃ遊びママゴト遊びをしました。おとぎ話を聞きました。童謡やテレビ・ソングを歌って、踊りました。

昔風の石垣の上の生け垣、小さいが気品のある門構と丹精込めた植木や香しい花の咲乱れる庭園があります。

鬼がわらのある屋根を見上げ、敷石の上を歩いて玄関を入ると、落着いた雰囲気になんか感じがわいて来ます。毎日「おはよう」「行ってきます」「ただいま」等の言葉がすばらしい詩を聞く様に楽しい家庭生活を演出します。好きな髪形に、かわいいデザインの服を着て、清潔感のみ

なざる部屋、きれいな食器に、彩り良く並べられた手料理をいただく、心に幸福感が満ちて来るでしょう。これは単なる実用か、そうではない。みんな芸術です。

芸術と人生

私は、孫たちと同居するようになって「おじいちゃんではない。サトッチャンと呼べ」と言っていました。子どもから「昔から思っていたが、父親らしい父親ではなかった。ガキが年をとっただけだ」と言われました。

そこで「今年から、おじいちゃんと呼べ」と正月に言いました。それで、おじいさんらしい模範的な人の真似をしようと思いましたが、人生はドラマと言いますが、正に演劇という芸術を学ばねば巧く生活できません。喜怒哀楽を勝手気ままに表現すれば、家庭生活も、社会生活もくずれてしまうでしょう。感情に流されず、それぞれの

立場を考えて、如何に対応するか、その役に成りきって自然に感じられるように、振舞うことが大切なのです。

孫たちは「八百屋さんだ」と言っ、ほんものの野菜そっくりの雑草を並べ「勉強するから、買って」と言います。最初は新聞紙を切りばりしてただけでしたが、その内に自分で文章を書いて「ふしぎしんぶん」という新聞を作り、「記者だ」と言っ、取材を始めました。

ままごと遊びと、バカにしていたのが恥ずかしくなる程の迫真的な演技で、処世術を、学び取るのでしょう。

芸術と遊戯

遊戯と似た言葉に遊技があります。これは、じょうずへた、勝ち負けをあらそう遊び、パチンコ、ゲーム機、等ですが、芸術と関係が乏しいようです。遊戯の方は、遊びたわむれることです。しかし、保育園とか幼稚園や小学校などで、運動と楽しみをかねて一定の方法で行う遊びという、これは芸術であろうと思われます。

不思議なことに、ここでは競争がありません。だから遊戯には優劣の評価も、差別選別も、当然ランクづけもありません。有名な美学者の井島先生がかつて言われた

「生の自覚」生きていることに気づく純粋な喜びです。それも、みんなで一緒に楽しむことが出来る。この中に素晴らしい芸術とは何かの秘密が含まれているのです。

芸術と落書き

アメリカの町でいたるところの壁にスプレー落書きがされて困った末に、町の広場に壁を立て並べ「落書きをここに描いて下さい」と宣伝し、今では落書き美術館と呼ばれているそうです。

何でもアメリカの猿まねを喜んでする日本でも、直ぐこのようなスプレールの落書きがはらんしました。

平城ニュータウンでも、高の原駅やサンタウン周辺、神功の池公園のアズマ屋の柱にまで落書きされました。この落書きはえげつない下品な文句が書かれていたので私が柱と同色のスプレーで消しました。その後は落書きされていません。他の所は今も放置されています。

今年の五月一日のTVで「難問解決！ご近所の底力・大迷惑・町の落書き・二度と書かれない消し方」という放送がありました。岡山県庁生活環境部岡山市落書き調査隊では、落書きを消して回ったそうです。東京都渋谷

区代官山タウンワーク事務局では、環境NPOグループJ5と協力して壁の落書きを消した後、近所の小学校の子どもたちに呼びかけて壁画の原画を募集し、入選作を拡大して、多くの子どもたちに描いてもらいました。

その後、その壁画の上には、落書きがされませんでした。そのことについて「描かれた壁画の画風が違ったので、落書きされなかったのですが、もし画風が似ていたら自分の方が上手だからと思って、上に落書きされたでしょう」と言われてられました。このことは、どちらも芸術なのだったが、落書きの方は町の人たちに嫌われ、子どもたちの壁画は好かれたという訳だったのです。

芸術と職業

「絵画の教科書」という本の中に「美術とは何か」という文章があり「原始時代のラスコーやアルタミラの洞窟壁画は、職業的な多くの芸術家があり、彼らによって多くの壁画が描かれたと考えられます。呪術の目的とはいえ、決して素人が描いたわけではないのです。」と記述されていました。あたかも原始時代にタイムスリップして戻って来たかのような自信には本当に感心しました。

職業とは、それを生業としてメシが食えるということであって、ケダモノを捕まえて生肉を食べていた時代にそんな職業があったのでしょうか。また、芸術家などが職業として成り立ったのはルネサンス以後で、正しくは近代からといった方がよいくらいです。それに、素人玄人などの区別も大昔はありませんでしたから、このようなお話は、どれほど当時の事実に近いのでしょうか。

しかし、これ程の話は珍しいですが、芸術は修行した専門家しか出来ないと言張する人は今までも沢山おられました。こういう人は「子どもの描いた絵は、芸術ではない」と言いました。それでは「どれくらい修行すれば芸術になるのか」と聞くとお答えになりませんでした。

芸術と非芸術

子どもとか、素人とか、画伯とか、だれが描いた絵画であろうと、歌手とか、他のだれかが口ずさむ歌でも、みんな芸術だと言うとだれかが困るのでしょうか。

例えば、スーパーで買った陶磁器の食器も、博物館に飾られている国宝と命名された物も、芸術作品だとしましょう。どちらが美しいと感じられるか、どちらの器に

盛った料理が美味しそうに見えるか、人によって様々かも知れませんが、だれでも自分の家のものか、せいぜい料亭の器が、美味しく感じるのではないのでしょうか。

もし、何かの間違いで「モナリザ」そっくりの絵画を自宅に飾ったりすれば、気持悪くなりませんか。また、ピカソの「泣く女」やダリの「内乱の予感」の複製でも応接間に飾ったら、そこはお化け屋敷でしょう。

「芸術とは何か」言うのと、直ぐ有名なへんてこりんな個性的とか言われるものだと何故決めつけるのですか。芸術とは優秀に決まっていると言うのも変です。立派な芸術もあれば、そうでないものもあるはずで、これも、あれも芸術だと素直に認めた上で、この方が美しいとかあの方が劣っているとか、批評すれば良いでしょう。

芸術と教育

学校での芸術の授業でも、点数評価ばかり重要視して天才とか凡人とか差別する教育が、流行していました。

現代の芸術の世界でも、コンテスト等優劣を競い争うのが盛んで、賞取れば威張り、落ちればひがむのです。音楽演奏の値段もピンは法外な高値、キリはタダ。つい

昨今のニュースでご記憶に残っているでしょうが「美術作品の値段も無名だと一万円、ゴッホ作と判った時いくりに跳ね上がったか」バカも休み休みしろと言いたい。

それでは一体、何の為に芸術教育をするのでしょうか。これは、前に記述したことですが、念のためにもう一度述べましょう。芸術は文化です。故に、決して先天的に受け継がれることはありません。教育によってのみ、後世に伝えられるのです。

生きる喜びを実感し、人間らしい、幸せな人生を生き抜くために、すばらしい芸術的環境を作り、感動的な芸術作品を制作し、充実した芸術活動を行うために、芸術の伝統を継承し、創造する為の工夫と努力をおしまない人になってくれるよう子どもたちに、正しい芸術教育を行うことが本当に大切であると思います。

実用と芸術

芸術は無用の用などと訳のわからないことを言う人がおられます。確かに、実用品を美術館や博物館に陳列すれば、だれも使えません。飾り物になってしまいます。

大昔は、音楽や舞踊はチケットを買って劇場で鑑賞する

のではなかったのです。日常生活に必要なことでした。

それでは、実用とは何かというと、科学と思うなら大間違いです。科学とは自然の真実を明らかにしようという学問ですから、過去とは未来とは、宇宙の果てとはなどという実用とは無関係の研究もあります。そこで、科学技術ならというと、最たるものは武器、人を不幸にするだけの不要な物ですが、家電製品や交通機関や医療技術までが、戦争に勝つための研究から発展したという皮肉な現象がありました。だからといって実用のために競争が必要とは、狂人でなければ、言わないでしょう。

ついでに、実用服とは軍服など作業服で、最も実用的家は兵舎や監獄です。実用的な食物とは宇宙食です。動物のように生きるだけなら、芸術は不要と言います。政治も経済も科学も、皮肉にも実用品も不要です。それでは、芸術とは、人間らしい生活に必要なのです。

芸術と環境

絵画や版画や彫刻や陶器、芝居や舞踊や音楽、映画やテレビ劇、詩や短歌俳句や小説、服飾や建築物、庭園、お香、料理、美容なども芸術であると言われています。

それらは天才の所産だとか、卓越した技術が必要だとかいう考えの誤りは、理解していただけたと思います。しかし、芸術はイメージとか、鑑賞の対象とか、思ってもらえません。これらは、自覚しなければ出来ません。

人間は、もの心つく以前から親の影響を受けていますから、教育のお陰という自覚がない。先天的に出来ると思っているのですが、その前に、先祖が昔からつくり続けてきた芸術的環境に影響されて生活しているのです。

世界文化遺産に大自然も含まれています。人が見て美しいと感じ、道を着けたから、文化・遺産なのです。

都市や建築計画も実用だけで、必要を重視しないから大阪歌舞伎座や京都霊山観音の裏はコンクリートの塊、京都駅ビルは南側無視です。奈良百年会館や鉄材公園は宇宙基地の様で西洋猿真似ホテルや幽霊ビル等で古都の美観を損なっています。人間生活にとって芸術的環境が如何に大切か、心から、祈念してほしいと思います。

芸術の評価

先述したように、芸術と言ってもさまざまで、優れた芸術もあれば、そうでない芸術もあるのなら、芸術の優

劣という評価は、どのようにして決めるのでしょうか。

その評価は、不思議なことに利害や立場や学説や観点等で違います。評価は、国家等の支配者、芸術評論家、芸術学者、学芸員、芸術鑑定家、骨董品屋、出版業者、教育関係者、芸術行事関係者、審査員、職人、芸術家、一般庶民の他、政治屋、実業家、金融業者、競売業者、投資家、税務署員、投機業の関係者、等もするのです。

しかし、評価は太古時代でも、自分勝手にはできませんでした。鳥でも求婚ダンスをしますが、評価をするのは相手の方です。社会生活をするようになり、評価は、族長にゆだねられ、やがて王侯や貴族が掌握しました。古代では、政治も経済も宗教も芸術も支配していたからピラミッドやスフィンクス、神殿等の巨大な芸術的建造物を造れたのです。中世の教会や壁画も、城も、法王や領主の力で出来ました。しかし、資本主義時代になって利権争い激しくなり、芸術も株のように、投機の対象となり、評価も利害打算で変化するようになったのです。

芸術の原点

人間は、関わる鉱物、動植物、生活する周りの環境や

事物に働きかけたりするとき、意識か無意識か、実用か非実用かわかりませんが、必ず何か加工をするのです。

昔、トンネルを掘っている人に「同じ土木作業でも、橋梁は花があるが、トンネルには華がない」と言うのと、「それはちがう、山の両側から掘るが、その前に機械で測定しなければならぬ。ミクロンの違いも許されぬのが、最後は直感できめるのだ。そして、完成した時に、何故か、みんな壁を磨いてつなげ、一条の帯を描く。

トンネルの彼方に永遠に続くのかのように働く光の帯、それを見た時の感動は言葉では言い表せない。握手し、またいっしょに掘ろうねと、再会を約束して、別れる。

美しい光の帯は、電車が数回通過するば消えてしまうのに」と話されました。これこそ芸術の原点でしょう。

古代、洞窟の奥の壁に、狩猟の成功を祈って、描いたことや、着飾って、歌ったり踊ったり、さまざま料理を工夫したり、家を造ることなどは、進化した後の優れた芸術活動でしょう。そういう訳で、次の機会には、いろいろな芸術の原点について考察したいと思っています。

創造と芸術

創造と言っても、無から有を創る訳ではありません。

あらかじめ、絵画、建築、演劇、料理とか一定の規格が定められている範囲で、今まで、他人が試みなかったと思われる方法や技法や仕上がり方を発明して、実行すること、とりあえず、芸術の創造と呼んでいるのです。

これは、工学や医学等の技術が進歩して、大企業が、国家の政治も経済も支配するようになって、特許制度が作られ、発見や発明が金儲けの元という保証が発端で、芸術も新発想が個性的と珍重されるようになりました。

古代エジプト絵画や彫刻など四千年も同じ様式、古代ギリシャも伝統を守りました。古代インドやアフリカの舞踊も何千年も似た振り付けですし、中国の書も基本は大昔から不変でしょう。日本の伝統芸能や伝統工芸では師匠の教えに忠実です。しかし、現代芸術家なる人は、創造に悩んでいるそうです。誰でも、芸術家なのですが、意識して創作を志すなら、芸術は文化であると自覚し、才能とか個性とか着想ばかり気にせず、美学と芸術史を教わり、世界的視野と伝統に学び、技術と直観を磨き、創造的意欲をもって、制作を続けてほしいと思います。

池袋モンパルナス回想

大野貞男

目のとどくところすべてすすきの原
まにまに灌木の小群があつて

狐 狸 イタチなど

ちよろりと出す顔にいきあたる

そのころまだ「池袋」とは聞いてなかつた

ボクは棒をふりまわして トンボや蝶を追っていたころだ
夜 強情つばりで喧嘩つばやい親父は

あたりにはひとつしかない丸太ん棒の裸街灯を目あてに
日銭を使い果たしてでれん でれんに酔つて

小屋のような家に帰ってきた

「送ってくださったあの人たちを中へ入れてくれ」
母は草履を足に引っかけ切れず表へでたが

誰もいなかった

「あれ見ろ 街灯の下に五人たってるだろ」

.....
「バカ あれが見えんのか」

.....
目をこらしてもボクにも見えなかった

「いつもの狐さんだわ」

母はぼつんとボクに言っつて電柱にふかくおじぎした

その後のことである

すすきっ原のなかに十軒ほど小屋のようなアトリエが
建ったのは

一人前に天窓もあつて

フランス帰りの画家や詩人や彫刻家があつまってきた
みんなピンボつたれで口達者

武蔵野の風にひょうひょうと袂をなびかせてやつてきて
煙のあがる七輪のさんまを囲み

安酒で夜を語り明かしていたそうだ
彼らは現代の美術の土台をコツコツ築いてたんだ

いま あのすすき達は

すっかりビルの群れに化けてしまった

その裏筋のドブぞいに

一軒 ボロ家のアトリエがまだ残っていて

九十になった絵かきの奥さんが

表で七輪でさんまを焼いている映像を見て

ボクの視線が凍ってしまった

そのうち きつと

想いも風もコンクリートにされてしまい

おしまいには

狐火のように

消えていくんでしょうか

(昭和初期 武蔵野のこのアトリエの群れを池袋モンパルナスと言ってたそうです。)

奈良を想ふ 十首

網干善教

ありし日の都の あとは はかなしや 枯野となりぬ 時の流れに
あざやかな 丹の色映ゆる 朱雀門 平城の都の 古しえしのふ
碧空に 菱波打つ 大殿の 建つ日待ちわぶ 寧楽の都に
秋篠の 川辺に建てる わが碑あり 沫雪舞ふ日 旅人ありしを

飛鳥にて

土深く 埋もれあるも 飛鳥京 池の小島に 生ふる松あり
水砕け 石に打ちたる 瀬々らぎの 明日香の川は 昔も今も
桧隈の 里に夕暮迫りくる 高松塚に 春月出るを

祇園精舎にて

諸諸の 行は無常と 仏説く 祇園精舎の 跡を掘りつつ
犬でなし 狼なのか 遠吠える 祇園精舎の 新月の夜
満月は 祇園精舎の 森照し 微風にゆれる 木木の法悦

束の間の母

荒居智子

日の天心ベンチに閉ずる眼裏に紅の生熱く脈うつ
飼猫の腹に手を置き歳晩のうすき縁のぬくもり分つ
たらば蟹の甲のすべてに抱く卵女の性をふと振り返る
買いしままありしこの帯締めかくる煌めきて束の間の吾の娘ぞ
子に和服着付をなせる背に言う「母さん生きててよかったね」

美しき宮跡

石井光子

ささらぎの今朝温かく宮跡に朱雀門の鷗尾陽に映えひかる
曲線の州浜美し東院にいにしえのまま白梅の咲く
高く低く燕の群れは乱舞して宮跡の葦に夕べ帰り来
南円堂に坐す観音拝みたりふくよかな顔臉にのこしぬ
御神渡りのごとく厚雲はなれゆき台風前夜月の耀ふ

しのぶ草

宇山碩成

八雲見し夕日に千鳥渡りゆく宍道の湖に秋風の吹く
笠縫の神の御魂と倭姫御座を求めてススキ野に立ちぬ
齋宮へ旅路は続くはらいがわ祓川コスモス持ちてミソギなさりぬ
五鈴川めぐりし姫はまほろばの神の御魂を奉りせり
磐余池いまはいずこか尋ぬれば鴨の鳴き声皇子をしのびぬ

はにかみ

大浦小枝子

甘樫の丘より三山スケッチすわれのみ見ゆる大極殿も
未来の夢なりし二千三年四月七日アトム生誕日にわれも会へたり
卯月きて未だ仕舞はぬ離段に結婚出来ぬと十七歳の娘言ふ
歳古れば難曲ならぬ後戻りせむ曲となる発表会に
ネパールのインズーちゃんの写真には幼さ消えて少女のはにかみ

孫は七歳

岡田越子

紅葉をバックに立ちて写真とる孫はすまして七歳の顔
ただ一本小さき花器に生けありて家元の作品何かが違ふ
誰一人来る人もなき冬のダム水音のみしてのぞけば恐し
久しぶり寄りしはらからうちとけて話もはずみ夜もふけてゆく
五千円はずみてお被ひ申込み今年もよきことあらむと祈る

キトラの貴人

片桐一夫

柳壁かくへきの四神千支しんかんしにみ守まもられキトラねじに暝きりし貴人きじんは誰たれぞ
長ながながき歳月流としつきれ現れしキトラ古墳こふんの天文図てんもんずとうとし
天文わんてんに我在われありし世よを觀しめさんのキトラ貴人きじんの御心みこころ惚しぶ
仰あおぎ仰あおぎ貴人きじんの御心みこころおもうかな黄道おうどう赤道せきどう春分しゅんぶん点てんに
畏かしこみてキトラの御世みよを諜しめさんと歳差さいさ遡そさ及ゆうを圖づし奉たてまつる

風のいたづら

木庭 和子

来年は中国訪はむと始めたる会話むづかし四声に八苦

草原の風想はする青年のバリトンで語る日本語快し

この足のしびれ癒ゆるを希ひつつ水行のごとプール歩めり

ふと浮かぶ普陀落渡海とふことば浮輪にねそべりプールただよへば

燠火なほ少し残りてそよ吹けばふとも燃えたつ 風のいたづら

思ひ出

玉置 小代

浄蓮の滝への長き石段を膝かばひ下る旧友らとの旅

ほろ苦き旧友へのおもひ風化せり四十年経てただになつかし

飛沫あげ音たて落つる浄蓮の滝の上に今虹かかりたり

大みそかの夜空を見上げ眩けりあの星が父その横は母と

雪の日に亡き母想ふモンペはき雪搔く姿たのもしかりき

還曆

寺嶋
りくお

還曆を顧すれば散り數ける椿のごとき涙かずかず
華やかなミナト神戸のルミナリエ点灯の日はわが誕生日
長男の恋人に花贈られぬ還曆は良き老いは悲しき
還曆を義父に招かれ高樓の「東天紅」に美味を食しぬ
寒き日の知人の死去や定年の知らせに老いの心なえゆく

金いろの

中川
都哉子

金いろの小鳥のごとしと詠われし銀杏散りゆくさびしき背せなに
金いろの広葉樹の上ひとひらの白雲はくうんゆるく流れてゆきぬ
平原の風と光とそしてなおはるけきものがわれを捉えて
高円の宮様かなし訣別の気配も見せて逝き給いけり
命びろいせし人乗せて満開の桜花の下へ車椅子押す

冬の洛南

馬場 恭子

穏やかなる昭乗の顔眺めつつ風雅を愛せし人を想へり
雪の舞ふ松花堂の庭静かなり昭乗垣に背すじをのばす
ギヤマンの波うつガラス戸なつかしく露地の庭石踏みしめて立つ
寒風に竹の庭園さわさわと金明竹が光を放つ
目立たねど透きとほるごと侘助は雪まじる風に小さく揺るる

凍れる月

松村 せつ子

突然に左目見えず思うこと全盲となりし亡き姑の強さ
病室の窓から見える紅葉を淋しくながむ小春日の午後
何もかも放り出したき時のあり凍れる白き月を見ている
なんとなく置いてけぼりにあった様そんな思いの年も暮れゆく
気にしないだけと読んでる新聞の水瓶座なる今日の運勢

平城山の径

森田陽子

雛の笑み戦火をくぐりわれと在り現うつに母のはげましをさく
平城山の榎紅き径たずね来て深まる秋に耳澄ましゐる
悔ゆるとも還らぬ刻を傷みつつ暗き夜空に冬銀河見る
足らざるを悔いつつ奈良の野に佇てば山桜白く空をおおえり
振りむかず今を生きむと三笠山やまを見る朝光かげのなか 桜花はな散りやまず

移りゆく春

安田和子

成人式の衣ととのう手を休め雪晴れに洩る光見上げる
白き瓜私の胸を過ぎゆけば冷たさにふるえる春寒の朝
散り初めし又兵衛桜は花の滝風立ちぬればしぶきさえ見ゆ
花びらも雨も降りしく宮跡の人々の笑顔こそ嬉しき歌会かな
白椿と若葉のカリンあわせ活ける静けさ心かへりくるはる

餛飩^{ぶと}まんじゅう

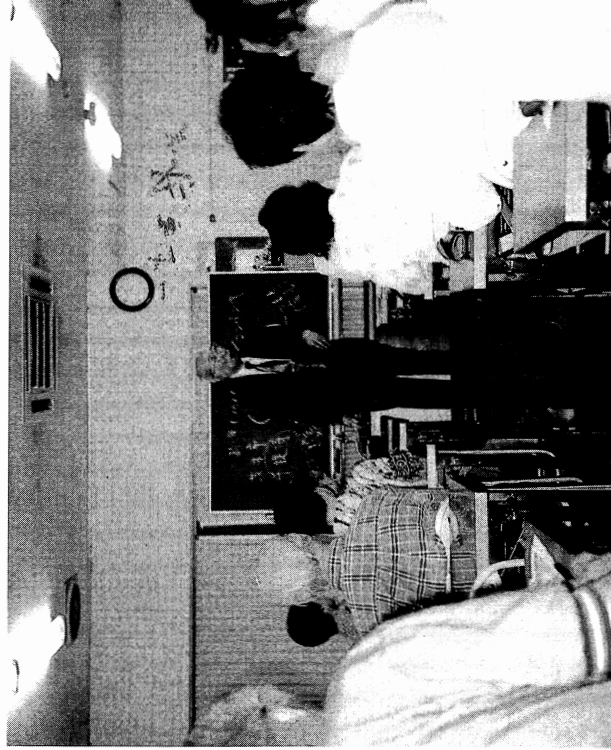
棉源 瑛

その名代早くに知りいしぶとまんじゅう初めて食べりうまかりしかな
兵の日の酒保に好みし油揚げのまんじゅう懐ふぶとまんの味
贈呈箋つけしままなる古本に猫に小判の俚諺浮び来

読みし跡ほとんとなしに古本となりいる寄贈書手に索漠の気
十数年なじみし古書店なくなりぬ理由は間はず文化の衰退



グループからの便り



歴史教養講座

寺嶋りくお

平成十年四月に、喘息の転地治療のために若い頃より好きだった奈良の地に、生れ育った大阪より移住し、五月の総会を期に歴史教養講座・写真同好会・短歌を楽しむ会に入会させていただきました。

そして、初めての講座は「日本書紀・卷二〇・推古天皇十九年の夏五月」からでした。若い頃、歌人の島田兵三先生について十年ばかり、万葉集を教えていただいたことがありましたが、久し振りの系統立った講義に語句の解釈、時代背景の説明など、習った万葉集や読んだ歴史小説・現地での見聞を裏打ちするお話しがとてもおもしろく、また、そこから派生する話なども楽しく思いました。

しかし、最近は日本書紀の講義が少なく、考古学の現状といったお話が多くなっています。それも、とても

興味深いのですが、折角、日本書紀を途中まで講義していただいているのですから、会の前半は講義、後半に考古学の現状としていただければ嬉しいのですが……。

それにしても、毎回、アカデミーの講堂がいつぱいの盛況です。これも網干先生のお人柄の賜ものですが、また、宿題や試験がないといった気易さもあるうことかと思えます。写真には、毎月作品十枚という宿題があり、短歌には、毎月作品二首および批評という宿題と試験があります、どうぞ、こちらにも創作の喜びを残しにお願いください。

私にとっては、平成十五年四月で移住満五年になります。始めの二年は、月に二〜三回喘息の発作があり、そのつど高の原中央病院で点滴注射をしてもらっていましたが、ここ二年ほどは薬こそ服用していますが、とても元気で、自由な隠居生活を満喫しています。これからも平成ニュータウン文化協会を近所づきあいの場として、歴史教養講座が未永く続くことを念願しております。

フォークダンスの会 玉置 小代

ある日の練習風景をご紹介します。雛祭りも過ぎたのに、外は粉雪の舞う寒い午後です。

少女に戻った笑顔で、仲間がダンスシューズを手に手に集まってきました。早速先生を中心に輪ができて、足ならしの曲から練習の始まりです。新曲の「オオサンナ」と、「大阪ラプソディ」などを繰り返し練習しました。みんな若くはないので、覚えるのになかなか苦労があります。でも、一日でどうにか音楽に合わせて踊ることができます。

宮川先生は温かなお人柄で、気長にご指導いただけるのでみんなが甘えすぎかも知れません。嬉しいことに今日は新しいお友達が増え、会員が十四名になりました。このグループは元気な人、愉快な人、静かな人達で、素敵なハーモニーで心が通い、暖かい雰囲気にも恵まれます。すぐにお友達になれますよ。

三時の軽いティータイムをはさみ、練習の終わる四時過ぎには雪も止んでいました。





いかがでしょう。月二回のグループ活動へ仲間入りなさいませんか。健康にもストレス解消にも大いに役立つように思います。

この秋には文化祭へ三回目の参加をする予定です。熱心な先生のご指導を頼りに、全員で意欲的に挑戦を始めてみます。

それぞれ個性を大切に、衣装を手作りするのも楽しみですよ。

詩吟の会

香川サワノ

詩吟は声量のある人が習うので、私のような体力×、声量×、音感×、その上高齢では、詩吟は無理と思いついで、仕舞だけを七年間習いました。が、習っている内に、作者の心情や美しい自然の情景を詠んだ詩等々に魅せられ、兜台に移り住むを機に詩吟を習ってみようかと思ひ、恐る恐る見学と云う事で教室を覗いてみました。その時吉本先生が「よう来てくれましたなあー」と立派なお人柄の、滲み出るような暖かいお言葉に、私は即座

に入会を決めました。

あれから二年半、ほとんど休む事なく西尾先生に御指導して頂き、今は少しは上達したように思っております。私の持ち吟は白帝城です。朝早く白帝城を舟で立ち、長江を下り（荊州迄）千里の道を一日で還ると云う中国の李白の詩です。悠久の自然の美しさ、豊かさや、詩中の情景を想像しながら、少しでも詩の心に近づけたらと、練習を積み重ねております。吟じる時の適度な緊張感、吟じた後の安らぎ、これこそ、心の若さを保つ秘訣かなあ！、とも思えます。

又、我が国においては、幕末から明治にかけ激動の世を生き、活躍した偉人の心情が偲ばれる詩や、日本を象徴する富士山、近畿地方の八幡、山崎、そして琵琶湖の名所等々を詠み込んだ詩、どれ一つとして郷愁を感じさせないものはなく私は大好きです。とにかく詩吟は大きな声を出す事でストレスも解消され、若さも保ち、健康という恩恵を頂いている事を実感しております。又詩中より学ぶものも多く、詩の心に従って、人間性をどれ程豊かに導いてくれるかも痛感しております。吉本先生、西尾先生を始め沢山の仲間との交流も素晴らしく、楽し

く日々豊かに過ごす事が何よりと思い、これからも様々な出会いを大切に、皆様と共に歩ませて頂きたいと思っております。

詩吟の練習日は、毎月第一、二、三、水曜日の午前と午後に分かれて練習しております。どうぞ、一度覗いてみて下さい。お待ち申し上げます。

短歌を楽しむ会

石井 光子

日頃短歌を詠みたいと思いつつも、独りではむづかしくて、そのまま過しておりましたが、たまたま「一度見学してみては？」と優しく云っていただき、「短歌を楽しむ会に初めて参加させていただいたのが、昨年四月でした。

楽しい雰囲気嬉しくて、すぐに入会いたしました。

毎月呻吟して二首詠みます。何度も読みかえし推敲したつもりでも、ハガキに書くときになると気がなる箇所が出てきて、訂正して出す事もしばしばです。入会の前は歌の形にならずに止めてしまいました。今はとにかく二首はつく



短歌を楽しむ会

らねばなりません。楽しい苦しみをしております。

第三火曜日午後の楽しむ会では順番に作者を伏せて、歌を鑑賞して意見を云います。

この時、自分の歌が思いと違う解釈をしていたくことがあり、ああ、この表現は曖昧だなと分り、次にはもう少し推敲せねばと思います。

最近の皆様のお指導のお蔭で、短歌が大分わかってまいりました。やわらかく適確な表現で歌を詠めるように、皆様のお歌をよく読み、歌集も読まねばと思っております。と、申しましても、なかなか精進出来ず第二火曜日の少し前から、歌を考える有様です。たまにすらすと歌らしく詠める時は、嬉しく思います。

月に一度、皆様のお歌を拝見して、教わる事が多く、「この句は次に使わせていただく」と思ったり、又自分の欠点もよく分り、会に入れていただいて良かったと感謝しております。

皆様の足手まといにならないように、努力したいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

パッチワーク研究会

井本 市子

パッチワーク研究会に入会して

子供達が家から巣立ち、夫婦二人になったので、今迄出来なかった、何か新しい事をしてみたいと思っていましたところ、文化協会のパッチワークの記事が目になりました。このような会で、楽しく習い事が出来れば、と思ひ入会いたしました。パッチワークの事は何も知らない全くの初心者でしたし、手先も余り器用な方ではないので、最初の頃は、不安で一杯でしたが、先生を始め皆さんが、和気あいあいとした雰囲気で、作業しておられるのを見て、とても嬉しく感じました。又自分の作りたい物が作れる自由があったり、マイペースで出来るという点も、私にとっては良かったです。そして何より私にこんな夢中になれる物が出来た事、が一番の喜びです。自宅に帰ってからも、ラジオを聞きながら、時には主人に見せながら、楽しく作業しております。

まだまだ未熟ではありますが、これ迄には、椅子カバー

六枚と、ペーパーホルダーのカバーを作成しました。現在は、先生に教えて頂きながら、この冬に向ってホットカーペットカバーという大きな作品に、トライして楽しく頑張っています。

これからも皆さんと一緒に、お話をしたり、作品を作ったり出来るのがとても楽しみです。

萬葉集講座

清水 昇

松岡先生の『萬葉講座』は開催されてから十五年経つが、私は受講から僅か四年だ。この十年の遅れは実に口惜しい。こんな、素晴らしい講座を知らなかったとはいえ、返す返すも残念である。

先生手作りのテキストは、原文・読み下し文・語訳・通訳があり、さらに学者の解釈の差異を網羅され、もちろん先生の意見解釈も述べられた完璧なものである。書店には注釈書がずらりと並んでいるが、原文の掲載されていない書物が多い。先生は原文にも取り組まないと、万葉集を学んだことにはならないと常にいわれる。大賛

成だが、ただ万葉仮名は実に難解である。

戯書について学んだ。先生は「脱線 脱線 また脱線」とふざけられたが、こうした脱線は楽しい。これからも大脱線を願いたい。教わった文字を紹介してみよう。

「山上復有山」↓この漢文をそのまま読めば、山の上下にまた有る山はとなるが、契沖が「出」と読んだ。漢字が日本に伝来したのは何時頃か定かでないが、万葉時代にこうした漢字遊びがあったとはスゴイ。この説明を聞いた時、私は幼い頃のナゾナゾを思い出した。「飛行機がドスンと落ちた。どこに墜落したか」↓「寺」である。つまらない話で恐縮だが、戯書については更に例示したい。

「二五」↓ $2 \times 5 \parallel 10$ 、だから「とを」と読む。

「二八十一」↓「2」と「八十一」↓つまり $9 \times 9 \parallel 81$ 、だから「にくく」↓「憎く」と読む。

「牛鳴」↓牛の鳴き声から「モオウ」、転じて「ム」と読む。

「馬聲蜂音石花蜘蛛」↓馬の鳴き声から「ヒイン」↓「イ」、蜂の飛ぶ音から「ブーン」↓「ブ」、そして、石花は「カメノテ」↓「セ」、蜘蛛は「クモ」、これを続け

て読むと、「イブセクモ」となり、憂鬱な気分の晴らし所がなく胸のふさがる思いだ、となる。

漢字遊びと評したが、先生の楽しい講義を拝聴した今は取り消したい。文字を持たない日本人が古来の歌謡、和歌などに漢字を縦横に駆使して音仮名・訓仮名と使い分け、日本語を文字化していく努力の結晶が万葉仮名である。先人達の叡智にはただ脱帽あるのみである。

私が万葉集を学ぼうとした動機の一つは、この万葉仮名をスラスラと読めるようになりたいことであったが、未だ道遠しが実感である。今一つは古代史勉強には万葉集学習が最重要である。先生はもちろん古代史にも詳しく独特の年表を作成され教えていただいた。これが「続日本紀を読む会」でもおおいに役に立っている。

二十五年前平成ニュータウンに転居してきた時、高の原駅の万葉歌碑に一驚した。前住地の大阪では考えられない。ああ、奈良にきたのだ、と嬉しくなったことを覚えていて。数年前、廣田さんに「右京の平成第二団地に万葉歌碑があるのを知っているか」と聞かれたことがある。案内してもらって又ビックリ。二十年間もその碑の前の道を歩いていたのに、気付かない私が不注意だった

かも知れないが、腰掛けに手頃な感じの庭石のようでひっそりと据えられた素朴な碑である。駅出口や団地の中に万葉歌碑があるのも、さすが万葉の故郷である奈良ではとまたまた感心する。奈良に引越してきて良かったとつくづく思う。

この拙文を書きながら思い付いたが、当面の私の万葉の旅は、せめて奈良市内の万葉歌碑すべてを巡り歩くことにしよう。扇野聖史書「万葉の道」を頼りにして、デジカメで撮り捲りパソコンに取り入れ、くりかえし見て、歌碑に彫られた万葉歌をすべて脳細胞にインプットすることを目標にしよう。

銅板レリーフ同好会

山田 正

銅板レリーフ同好会も、発足して確か七年目を迎えた
と承知しております。 私自身は

入会してやっと三年目といったところですが、この間
技術面の進歩はともかく、月二回の教室を休むことなく
楽しみながら参加することができました。これも一重に

教室の明るく和やかな雰囲気と、先輩方の優しく親切なご指導の賜と感謝を致しております。

入会のキッカケは、お誘いをいただいて教室を見学させていただき、「自分にもできるかな」と取り組みやすさを感じたことでした。今もこの気持ちに変わりはありませんが、同時に奥の深さと自分自身の課題も改めて感じている昨今です。

具体的には、一つは素材・図柄の選択です。本来は、オリジナルな図柄が望ましいでしょう。しかし、絵心の全く無い私は、これを補うために、写真・新聞・雑誌・パンフレット・その他幅広くから素材を探し出し、模写し利用しています。仕上り状態を想像しながら適当な素材を見つけることは、私にとってはなかなか大変なことなのです。

次に着色です。レリーフ（浮き彫り）した作品を、入浴剤（ムトウハップ）を入れた水又は温水に浸けて着色します。作業は単純なのですが、仕上がりは液の混ぜ具合、浸す時間、そして磨き方によって様々に変化します。希望する色にはなかなか仕上がりません。そこが悩みの種であり工夫を要するところです。

そんな中で、ときに狙い通りの素晴らしい色に仕上がる
ことがあります。その時は、人知れず満足感を味わうことが
できます。失敗を繰り返しながら、一回でも多く満足感を
味わえるよう努めていきたいと考えています。

最近、二人の方が新しく入会され、教室の二時間は、
一段と明るく和やかになりました。

興味をお持ちの方は、ぜひ気軽に覗いてみて下さい。

毎月第一・第三金曜日の午後一時から三時まで。

平城西公民館でお待ちしています。

中国語同好会

谷村 昌子

私は今年の二月からこの講座に入れて頂いたばかりの
新人です。きっかけは主人が去年の四月に中国の大連へ
赴任したからです。今まで私は、八月と十二月の二回遊
びに行ってきました。そこで感じたことは、やはり言葉
が話せたら何倍も楽しくなるだろう。また会社の女子社
員とも仲良くなって、国は違っても女同志いろんなこと
を喋れたらどんなにいいだろうということでした。



中国語同好会の皆さん



天津 ^{コフブライバオス}「狗不理包子」の店 中庭にて (右側 松村)

それでこの講座を受講し始めに訳ですが、この講座の良いところは、何と言ってもテストがないことです。また先生が何度でもやさしく丁寧に教えて下さるので、教室の雰囲気はとても和やかです。また授業の後半には、テレビでNHKの中国語講座も見たりして、とてもよい気分転換になります。

私の中国語の力がどれだけつくかは、偏えに私自身の努力によりますが、細く長く続けて、その成果を試すべく、大連行きが待遠しくなるように頑張りたいと思います。

最後に簡単に大連の紹介を——関西空港からは、わずかに二時間強の近さで、人口は約五四〇万人、高層ビルがたくさん建っている大都市です。ご存知のように、戦前満州鉄道の本社などがあり、その当時日本人が全人口の一角を占めていたなど、日本に縁の深いところです。今でも市内に多く残る戦前からの建物（大和ホテルや横浜正金ビルなど）は、一部の日本人に強いノスタルジィを感じさせてくれます。

料理を楽しむ会

井筒 節子

料理を楽しむ会に参加して

陽ざしもやさしくなった弥生三月の料理の献立は、甘さもほどよい小豆と青のり、きなこの「三色おぼし」、貝柱、えび等の入った暖かい「小田巻き蒸し」、柚の香りもよい「大徳寺和え」でした。

皆で和気あいあい、楽しくつくり、十分に味わい、この日もお腹も心も満足しました。

この日三月二十日は、イラクの開戦の日で、緊迫した情勢のさなかでしたが、平和な日本でおいしい食事をいただき、仲間との楽しい会話もはずみ、幸せな気分です。路につきました。

この会は、旬の食材を使った家庭料理で、美しい彩度も味も楽しめる和食が多いようですが、スペインのパエリア、ベトナムの生春巻き等の多国籍の料理もあり、手軽なおもてなし料理になっています。

手作りのソーセージも、子供や若い方に好評です。



料理もおしゃべりも大好きな仲間です

又デザートに季節の果物を使って、「苺のババロア」、「いちぢくのホワイトソース煮」、又おやつに、枝豆を使った「ずんだ餅」も美味しくいただきました。このように、毎回いろいろな食感を味わうことが出来ます。

日頃の食事の献立がワンパターンになりがちで、私はつい好きなものばかり食べて、偏食していることがあります。この会で、自分の食事を見直して、反省出来るよい機会にもなっていますし、レパートリーもふえてきてよろこんでいます。

料理作りを楽しみ、それを美味しく食べることが健康に繋がります。

「食という字は、人を良くする」と書きます。生きる力、働く意欲の源となる毎日の食事を、大切にと考えています。

いつもさわやかな笑顔で、季節の素材や調味料等、いろいろ準備して下さっている松村さんに、感謝しつつ、楽しく、参加させていただいております。

木目込み人形・押絵同好会 谷口 直子

北千里から阪急電車で日本橋へ、近鉄に乗り換えて高の原迄、月二回の人形同好会への出張は、ほぼ片道二時間の小旅行と心得ている。電車から矢つぎ早やに流れる見慣れた景色をボーと目で追いながら、ふと数えてみると十八年間もの同じ景色を見て来たわと気が付き、この長い時間の経過の中で、体力、気力、根気、物覚え等に、以前と少なからず差があることに、愕然として意気消沈していたけれど、今や観念の域に達している。

人形同好会にみえている仲間は半世紀以上生きて来た方々だし、それぞれ個性的で強者揃いである。その方の個性の息吹が木目込み人形に、押絵に吹き込まれ、作品となって出来上がり、毎年の秋の文化祭を飾り彩っているのと、一般的には異なる個性同志だと衝突が付きものと考えがちですが、人形作りを介してだと、同じ方向を目差して生ずる不思議なエネルギーで教室は、いつも雰囲気はなごやか、教室は居心地がいいからとて気を許してはいけません、免許皆伝の強者は人形を作るとみせか

けて、口で、前から横からと打ち込もうと構えているのです。「どっこい」、多勢に無勢、背中に、頬に刃風を感じながら、横に、斜めに、今日も朝十時から逃げ回っています。こちらの力不足を嘆いても始まらず、口助っ人と新しい人形作り参加者を募っていますので、よろしく。

表装の会

石井 英治

わたくしたちの奈良市は八世紀のむかしに、平城京がつくられ、およそ、七〇余年間奈良は古代の日本の都として栄えたことを深く思いをいたし、またその平城宮跡等が史跡として世界遺産に登録されたことをほこりに、この豊かな文化を地域生活のなかに生かし求めていかねばと思います。

それには、各地域での学習活動の場の拠点となる市の公的施設での利用を願い、それぞれの分野で同じく趣味を志すもののふれあいと生がいを大切にしたいと思えます。

私は、二度勤めの後の第三の人生とも云える現在、自

由な生活環境の時間のなかで、心身に適度な望ましいストレスは必要なものの、望ましくないストレスの発生要因も今のところなく、健康で楽しく過せることを感謝しております。

そのような生活のなかで、長年の夢でもあった絵心などある人間ではないが、絵を鑑賞することは好きだったこともあって、自身で描いた未熟な絵でも床の間に掛軸として眺めることで、少しでも心にゆとりのある暮らしを味わってみたい、他方で水墨画の講座通いを始め、墨のにおいをかいでおりますが、その後、平城ニュータウン文化協会での講座「表装の会」で学ぶことのできるご縁をいただき、目下人望の厚い西島先生の指導のもとで老いた頭を駆使しながら無我夢中で掛軸づくりに取り組んでおります。

通常、一般的には掛軸づくりは裂に作品(本紙)を張つてあるか、裂をくりぬいてはめ込んである程度にしかり解されていないらしく、また、多くの場合、表具はほとんど表具師まかせになるのではとの思いもあります、素人の私達が西島先生のもとに、自分なりの個性に合った手づくりの掛軸が出来ればと、その習得に励んでおり

ます。

掛軸づくりは全て、作品はもとより廻りを飾る裂地や和紙にも裏を打つ。(裏側に紙を付ける)裏打ができれば軸や額を仕立てることができると。

何んとしても自分の作品を裏打するには、これをマスターしなければならぬ。

目下のところ、新参の私は西島先生の懇切丁寧な指導に、先生のひとこまひとこまに気迫を感じ、その至難の技に感服しながら、作業工程を一挙一動を喰い入るうに見つめ、また、先輩の方々の助けをいただきながら悪戦苦闘の授業風景でございます。

何よりも観察眼が広まったようで、今まで何げなく見ていた絵の展覧会や、床の間の掛軸に絵や書の描いてある本紙と裂との調和、裂の美しさとの取り合わせの配色など、入念に観察している自分を発見します。

まだまだ先輩のような仕上りには時間がかかりませんが、皆さんに励まされながら人生で最高の時期を楽しんでおります。

俳句入門

牧野 和代

俳句入門講座のこの一年は、悪事の連続でした。

句会の最初の幹事であった柏木一枝さんが、昨年六月九日、八十八歳で永眠されました。控え目で奥ゆかしいお人柄で、長い間、会のために御尽力下さいました。過ぎし日のことが走馬燈のようによみ返って参ります。ご高齢とはいえ、長いおつき合いであった私にとっては、本当に淋しい限りでございます。

謹んでご冥福をお祈り致します。

合掌

私の脑梗塞、幹事の西山佐代子さんの心不全と腎不全そして伊藤柳紅さんの脑梗塞と思ひもかけない出来事つづきでした。この間、込山様、南村様、藤澤様、岡様等の役員のご努力によって、会をここまで導いて下さったことに対し、有難く頭の下がる思いです。私も退院はしたものの、後遺症による右半身麻酔の不自由な生活ですが、これも『佛様から賜った病、たとえ死に至る病であろうとも、心静かに拝受しましょう』と心に決めまし

た。そして、この不自由な生活は、私にとっては普通の生活であり、むしろ『障害をもつことこそ私の特権である』と、思えるようになって、身も心も軽くなりました。目下自宅と病院でのリハビリに励む楽しい日々をすごしております。

今年、「平城山」・「平城山二」・「平城山三」につづいて、「平城山四」を八月に発行する予定で準備がすすんでいます。一人一人の努力の結晶を、足跡を見ていただきたいと思います。

幸い会員も増え、私も不自由に馴れ、本来の私に戻りつつあります。再び意欲を燃やして、作句に取組んでいきたいと思っております。

西山佐代子さんも、随分お元気になられ、今月より句会にご出席下さると伺い、うれしいことでございます。

伊藤柳紅さんのあの温顔に接する日の早かれと、ご回復を祈っております。

皆様も、どうぞ、「第一に健康、第二に健康、第三に健康」にとご留意下さいませ。

写真同好会

伊藤 昌一

私が写真同好会に入会させて頂いたのは、平成十年の秋でした。第十五回文化祭の会場で、写真同好会の作品を見つめておりましたら、同好会の世話役赤坐様から「写真がお好きですか、入会されませんか？」とお声をかけて頂きました。丁度そのとき私は、山野草が好きで数種類育成栽培しており、美しく咲いてくれた花姿を撮影し残しておきたいと思っていたところでした。

あまり深く考えずに入会させて頂いたところが毎月の例会に出席する度に、写真技術の奥深さが解ってきました。当初はどれがピントがあっているのやらサッパリ解りませんでした。恐らく当初は、赤坐さまをはじめ皆さまにご迷惑をおかけしたことを思います。

例会には、これはよいのではないかと思った作品を、皆さんに見て頂くのですが、いろいろと批評され落ちこぼれたり、よし頑張ろうと思ったりして今日に至りました。

昨年の六月に、「柳生花しょうぶ園」で写した一枚

(四ツ切ワイド)を、「柳生の里写真コンクール」に応募したところ、平成十五年二月に柳生観光協会より、写真家岡田栄一氏を審査委員長として審査の結果、佳作入選のご通知を、柳生窯で焼かれた「ぐい呑」と一緒に頂きました。入選作品は柳生武家屋敷に掲出して頂いています。これも皆さんからご指導頂いたおかげと喜んでおります。

これから写真をやってみたいと思っておられる方がおられましたら、是非ご入会をお勧めいたします。他の写真クラブにも参加してみました。が、話題は機材自慢、腕自慢、そして聞きなれない専門用語が充満していて到底ついて行けません。それに比べて当同好会は、解らないことは懇切丁寧に本人が理解するまで教えて頂きます。私はこれからも皆さんのお荷物にならないよう、何とかくっついて行くつもりです。

当会の概要をお知らせします。

◎会の世話役 赤坐右一氏(電話七一一〇一一)

◎会員数 二二名(男性一五名女性六名)

◎例会の場所 平城第二団地集会所



◎例会の日時 毎月第三土曜日 一〇時〜十二時

◎撮影 日 その月の行事・催し・花だよりにより

前月の例会時に決められます。

昨年は、奈良町界限・二月堂夕景・奈良公園灯火会など…その時どきに技術的な指導があります。

年間撮影会等の行事記録

平成十四年四月 京都市内

五月 奈良町界限

七月 二月堂夜景

八月 奈良公園 灯火会

九月 東大寺二月堂の盆踊り

十月 薬師寺万灯会

N T文化祭参加

十一月 浄瑠璃寺付近

十二月 木津川・沈下橋と流れ橋

平成十五年一月 若草山山焼き・平城宮跡より望む

二月 桜井市お綱まつり と

河合町砂かけ祭り

読書会

山内 梅乃

読んだ人、読めなかった人一人様に「おはようございます」の挨拶で読書会は始まります。同じ本を読んでもそれぞれ感じかたの違いには、感心したり納得したり、指導者のいない会ですが話しは盛りあがります。

読書会発足当時の、故大橋先生よりのお言葉「あせらず、きばらず、楽しく読んで、語り合う」をモットーにこれからも続けていきたいと思っています。

毎月第四金曜日 十時～ 北部出張所会議室

平成十四年度

読書会の活動

四月二十六日 「桜守」(水上 勉著) を読み

文学散歩

樹齢およそ四五〇年の巨桜は、今が盛りと満開に咲き誇っていました。文中に出てくる桜を実際に見学し、桜を愛した人々の思いがそこそこに感

じられ、あらためて自然の大切さ、生命の尊さを感じた文学散歩でした。

白川郷合掌集落見学の、ガイドさんの説明も良く、帰る時間の延長も、苦にならない帰途となりました。

五月二十四日 松岡先生による講義六回目

『枕草子』「すさまじきもの」

小学館発行の「日本古典文学全集」『枕草子』の資料を参考に、松岡先生独自の解釈で講義は進められた。講義はわかりやすく難しい古典の文法も、先生の丁寧な説明でよく理解することが出来ました。

六月二十八日 松岡先生による講義七回目

『枕草子』「すさまじきもの・たゆまるるもの」

五月に続き「すさまじきもの」の講義を受講。わかりやすく丁寧な解釈は、松岡先生ならではの、例えば「さわがしう」とある文章には、三つの解釈があるとのこと、いそがしい・やかましい・不安で、ここでは資料通り、「いそがしい」とした方がよいでしょう、などです。

七月二六日 「沈まぬ太陽」一一五 山崎 豊子著

南村 照榮

会社という組織の中で、疎まれた主人公労組委員長恩地元・副委員長行天四郎の、互いの生き方の違いがずっと尾を引き、パキスタン・イラン・ケニアと一〇年にわたる赴任。「ここまで不器用に生きられるのだろうか」と読書に言わしめた。

文中の「鏡の間」の話。ニューヨークにある動物園のアフリカゾーンにあり、ゴリラやオランダウータンが入っている舎で、鉄格子をはめ込んだ檻があり、見ている人間の上半身が映るその鏡の上に、記されている言葉は、「世界で最も危険な動物」と納得。(1941年に作られた)。

八月 休み

九月二七日 「亡国のイージス」上・下

福井 春敏著

自衛隊をも巻き込んだテロリストの攻撃。防衛庁情報局二曹の如月 行の働き。そして、先任伍長の仙台恒史と「行」の友情など、有り得ないと思いつつどんどん小説のなかに引き込まれ、はら

はらどきどきしながら読んだ。

ただ中盤ころにでてくる船艦や艦内の説明が長く、興味のない者には読みづらい作品でもありました。

十月二五日 「宿命」 高澤 皓司著 木庭 和子

通称「よど号」事件として、忘れられない赤軍派の学生九人の、目的地北朝での亡命生活三十年間の記録である。

たまたま、この本について話し合う例会に前後して、小泉総理の訪朝があり、金正日総書記が拉致の事実を認め、陳謝したばかりの時であったから、議論は沸騰した。

「世界同時革命」という妄想にとりつかれた、幼稚でオソマツな革命の兵士たちは、「北朝鮮」のブラックホールに吸い込まれ、チュチェ思想に洗脳され、偉大なる首領さまに忠誠を誓う戦士に生まれかわる。そして自らも拉致に関わってゆく。アジアの各地から、ヨーロッパの街角から、或る日突然消えた人々、彼ら、彼女達の中に赤軍派の亡命者の妻にさせられた者もある、と言う。

リーダー田宮高磨と、親交のあった著者の何度かのインタビューに、少しづつ話し始めた田宮は急死する「心臓麻痺」。

まだまだ多くの拉致被害者や、よど号残留者の生きている現在、書き得ない事情もあるかもしれないが、続編をぜひ読みたいものだ。

十二月二二日 「いい日本語忘れていませんか」

金田一春彦著

我々が何気なく使っている、言葉の意味や語源を、わかりやすく文章化した作品。

例えば、「文句を持ちこまれても筋がちがう」という語は、古く平安時代の「和名抄」という字引にも出ているが、「筋、すなわち、筋肉の繊維は、もみ療治にとっては大事な療治の対象。もみ療治筋に由来した文句か」と、ある。読んでいて飽きない本なのですが、情ないことにすぐ忘れる。

十二月二〇日 「長く暑い夏の日」 渡邊 淳一著

腎臓移植という人間の生死の極限状態をテーマに描かれた作品で、ハラハラしながらいっきに読んだ。

最近の小説に、意味の判然としない言葉や、いきなり過去の場面が挿入されたりするので戸惑うことが多いが、この小説は、題名通りに物語が展開され、とても読みやすい。

一月二四日

新春の集い。京都府八幡市「吉兆」にて

(自由トーク)

二月二八日

各自読みたい本を選び読後感を発表。

「生き方じょうず」「生きるヒント」「話しを聞かない男・地図を読めない女」「天皇の密使」「母」「絹扇」「新しい人よめざめよ」「金子ミズズシリーズ」。

作者の生き方に魅力を感じたり、忠実にもとずいて書かれた作品に驚き。美しい詩に感動を持った作品など、今までの読書会と違った試みも、たまにはよいのではないか。

三月二八日 「プリズンホテル 夏」 浅田 次郎著

やくざの親分が経営するリゾートホテル。そこに宿泊した人たちと、従業員の奇妙な人間関係も

ようが展開される。

最初は、著者につられて読むことになった本だが、読むうちに、夫婦とは家庭とは e t c ……と、考えさせられるところもありの結構面白い作品。

英語初級・中級講座

橋本 友子

昨年度から英語初級講座を始めましたが、今年度から中級講座と二つになりました。毎週月曜日午前九時半から十時半、十時半から十一時半の一時間づつですが、まん中の二〇分を共通にして、英語の歌を歌っています。歌は日本語と英語の音節の違いを意識させるのにもってこいだからです。一つの音符に一音節が原則ですから、子音一つに母音一つという単純な音節に慣れた日本人にとって、一つの母音の前にも後にも二つ以上の子音がついた英語の音節は聞き取りも話すのも、苦勞の種です。くり返し歌を聞き、歌うことによって、その困難を意識し、身につけることが、比較的容易になります。

とは言え、言葉はとにかくくり返し、浴び続けることで身につくものですから、苦痛にならないようにしながら、なるべく長時間楽しむことを心がけています。「英語は苦手」という人でも「日本語は苦手」という人にはお目にかかったことはありません。一つの言葉が身についていれば、必ず二つ目、三つ目の言葉は習得できるものなのです。

やりたいと思っても、やらないための口実はいくらでもあります。やろうと心が動いたら、いつでものぞきに来て下さい。初級は、現在使われている中学一年生の教科書をテキストにして、文字通りABCからやっています。中級は、英語の落語とも言うべき、最後に落ちがあってワハハと笑える短いストーリーを集めたものを、リスニングに重点を置いて勉強しています。

いつからでも、どこからでも、身についただけもうけものと思って、始めませんか。

「……歩く会」

廣田 省吾

松岡先生より「……歩く会」の窓口を引き継いだのが平成六年で、あっというまに九年経ちました。何の知識も無い私でしたが、参加下さる皆様に出来るだけ楽しく歩いて戴けるように心掛けております。

平成十四年度の「……歩く会」は左記の様に歩きました。

四月二十八日(日) 晴れ 郡山城下町周辺 二度目

三月に歩いた時は郡山城址では桜が咲いていましたが、今回の郡山城址は緑に包まれての歩きでした。

全員で四名で「和田徳」の主人に昭和初期の珍しい広告を見せてもらったり、旧郡山城主柳沢伯爵のお墓の立派さに感心したり、最後に見た金魚一匹の値段、十二萬円に驚いたりの楽しい一日でした。(参加者三名)

五月十七日(金) 曇り 馬見丘陵公園

曇り空ながら近鉄田原本駅から、五分程歩いて田原本線、西田原本駅に乗り換え池部駅下車。古い建築が残っ



馬見丘陵公園 ナガレ山古墳にて (02. 5. 17)

ている河合町役場の前を通り馬見丘陵公園へ。馬見丘陵は大和高田市、香芝市、広陵町、河合町に広がる多くの古墳が集中している。主として河合町に広がる馬見公園は現在、県によって整備されています。大きな古墳の割りには優しい名前の乙女山古墳を、お濠り越えに眺め、きれいに円筒埴輪が並び復元されている、ナガレ山古墳に上って大和盆地や周囲の山脈を見渡し古代の人々の暮らしに思いを馳せました。そこで昼食。隣接する広陵町の竹取公園から『竹取物語』の話の中に出て来る、"さぬきのみやつこ"にちなんだ讚岐神社を拝し、帰途の途中蓮如上人の開基の教行寺の大きな伽藍に目を丸くし、聖徳太子に縁が有ると言われる大福寺を後にして近鉄箸尾駅へ。曇り空ながら雨に降られず整備された古墳公園と御伽噺にちよっぴり浸った一日でした。(参加者九名)

六月二十三日(日)曇り 五月実施した馬見丘陵の二回目 少人数での歩きは、わいわいがやがよとは、行きませんが気ままに楽しく歩きました。(参加者三名)

七月・八月・九月 お休み

十月二十七日(日)晴れ 石清水八幡宮から松花堂迄
平城ニュータウンに案外と近くに有る、石清水八幡宮

と松花堂へ歩きました。近鉄京都線丹波橋で京阪本線で乗り換え八幡市駅下車。目の前の男山に日本三大八幡・石清水八幡宮が鎮座されております。幅の広い石段を一步一步踏み締めるように上ると途中に松花堂跡が有ります。展望台から淀競馬場や、はるか京都市内を望みました。石清水八幡宮を参拝、八幡さんは休日でもあり七五三でお参りする親子連れで賑わっていました。下りは"せせらぎの道"と呼ばれる道を通って降りました。頭上を樹木を覆い陽が遮られ、落ち葉を踏み締めての歩きは最近こんな所は久しぶりと好評でした。松花堂へ通じる道には石清水八幡宮と関係が有った由緒深い寺院が並んで居ます。現在の松花堂は男山にあったが明治二四年に移したもので庭内には種々の竹が植わっています。又庭内には東車塚古墳が有り後円部が築山として利用されています。此の松花堂庭園の入り口には和食で有名な吉兆が"松花堂弁当"を出しておりました。

帰りは西車塚古墳の上に立つ、豊臣秀頼寄進と言う八角堂を観て、まっ直ぐ駅へ。

戦の神さんで知られる八幡さんと、茶室の点在する風雅な松花堂庭園を何の違和感も無く見られるのは日本人



石清水八幡宮前 (02. 11. 15)

だからでしょうか。

(参加者七名)

十一月十五日(金) 薄曇り

石清水八幡宮と松花堂の二回目。前回と変わって薄曇りの日でしたが周囲は紅葉に彩られた中を歩きました。松花堂庭園の楓、帰る途中の善法律寺での楓の紅葉の見事なこと、皆さん顔を紅く染めて今日はこれだけでも十分と満足されたようでした。
(参加者九名)

十二月・平成十五年一月・二月、お休み

三月二十八日(金) 大阪上町台地から難波宮跡まで

近鉄上本町で下車。地下道を上がると目の前は林立するビルと絶え間無く走行する自動車が目に飛び込んで来ます。リュックを背負い歩く姿の私達は一寸場違いの感じます。ビルの谷間を抜けて大阪の人から高津さんと呼ばれている高津神社へ、境内の桜は三分咲きでしょうか。かつて、此処は上町台地からの眺めは大阪一と言われていたのですが、今は目に入るのビルばかりです。この辺は寺町と呼ばれていてお寺が並んで居ます。高津神社の東側に本経寺と云うお寺が有り墓地に人形浄瑠璃の勃興期に名を馳せた豊竹若太夫の墓所が有りました。又、元禄文学の花を咲かせた二人、谷町筋のガソリンスタン



難波宮跡 大極殿 (03. 3. 28)

ドとビルの間には片身が狭そうに近松門左衛門のお墓がありました。井原西鶴のお墓も寺町の誓願寺に有ります。更に東に歩くと三韓坂と呼ばれる坂を上った所に円珠庵と言うこじんまりした小さなお寺があります。江戸前期の国学者契沖のお墓がありますが、例年契沖の菩提を弔う意味で、一月二十五日のみ一般に公開されている。境内に「榎」があり、鎌が打ち込まれて赤さびているが、酒・勝負事など悪縁を絶つための願かけという。

真田幸村が大坂冬の陣で出城を築き徳川方を苦しめた古戦場と言われる真田山公園で食事。近くの宰相山公園には大坂城に通じると言われる抜け穴があります。此処から北の方へ聖マリア大聖堂の前を進むと道路の中央の茂みの中に細川越中守の屋敷跡の井戸が有ります。細川越中守忠興の妻は明智光秀の娘、玉でガラシャ夫人と呼ばれ夫の意志に殉じて自殺したことで有名である。辞世の句を刻んだ記念碑が井戸に並んで建てられている。

玉造の地名にちなんだ玉造神社に寄りました。此処は伊勢神宮参拝の起点とのことです。境内の桜は八分咲きでした。又阪神神戸大震災で倒壊した石の鳥居が記念に残っていました。

森ノ宮神宮に参拝。神社の横に建つ市立労働会館の中に、ビル建設中発掘された縄文中期から弥生・古墳時代から江戸時代始め迄の複合遺跡の土器や石器などが展示室に並べています。見学後、今日の最終地である難波宮跡へ到着。その所在は全く謎に包まれていたが、大正二年中央区法円坂の陸軍被服支廠の工事現場から出土の奈良時代の僅か2片の古瓦が難波宮の研究の端緒となったと言ふことです。そのことから大阪と言ふ大都会の真っ只中に此のような史跡が残されました。大極殿跡に立って聖武天皇や仁徳天皇の時代に思いを馳せました。道路を隔てて立っている新しいNHKを見学、9階に登り市内を展望して今日の歩く会の締めくくりとなりました。今年も無事歩くことが出来ました。健康の為なんて言うて歩いています結構、疲れる時もありますが、快い疲れです。そして楽しいですし、いろいろな知識が人により与えられます。毎回ご参加下さる皆様、アドバイス下さった皆様、本当に有り難う御座いました。お願い。歩くのに良いところがあったら教えて下さい。

地酒を味わう会

岸本喜代乃

地酒の会と美酒爛漫

高校の夏、友達の家で麦酒を出されたのが、酒との初めての出会いでした。旨そうに飲む友達を横目に、苦いだけのビールの泡を眺めていたものです。それ以来、徐々に酒を飲む機会に恵まれ、美味酒、自棄酒、寝酒に付き合酒、果ては味見酒まで、たしなむ様に成長しました。これは明らかに、DNAのなせるワザ。昔は父が私を相手に晩酌を楽しんだ。父が自分で爛かんしてくれますが、まず台所で冷一ぱい、それから一緒に晩酌、そして又寝る前に、改めて乾杯、その父が亡き後、こんどは兄が帰省の度に、家族の中でただ一人飲める私を相手に晩酌。酒好きの兄は、何時か仕事の帰り居酒屋で飲んで、車で帰宅の折、眠り込んでしまい終点まで。さて帰りの列車は無く、駅員さんの好意で荷車かで戻してもらった。しかし、又同じ失敗をした時、駅員さんは「この前の人だ」と言う事で、今度はやむなく旅館で一泊しての朝帰り。



①



②



③

昔の田舎での話、そんな話を聞きながらの酒は美味しく、楽しいものでした。その兄も逝き、今となっては寂しく懐かしいもので、思い出酒となりました。

そんな中で「地酒を味わう」というサークルを知り、陰陽極のごとく吸い寄せられたのが入会の動機でした。このサークルは言わば、友好の酒。老若？男女、美酒と肴に花が咲き、いつもあっとい間三時間です。

毎回場所を変えての月一回の例会に加え、今年は生駒市にある「往馬」の〇〇酒造の酒倉見学にも参加し、圧巻は二月に一泊三日で信州白馬、八方和田野の森「ヒュッテあづみ」で行った例会、金曜夜にバスで高の原を出発し夜明け前、白馬に到着。スキー組と観光組に分かれ、スキー組は初心者から往年の達人まで。四十年ぶりに板を着ける私などはまるでギブスの様な靴に恐れながらも、真っ青に晴れわたった空と真っ白な雪に、ただただ感動の嵐！。観光組は長野五輪で使われた白馬ジャンプ台を見学、午後は私も加わり、大野温泉郷まで足をのばし、北アルプスの山を眺めながら、露天風呂で疲れを癒やしました。夜には双方合流して、特参した「梵ときしらず」、「田酒」などの地酒と、宿の心尽くしの手料理で楽しい

ひと時を過した。(余談ですが「あづみ」のチーフは平城ニュータウン出身)。

翌日は信濃大町の「白馬錦」に立ち寄り酒蔵見学。酒好きな面々は興味津々。機械化された酒倉、研究探索される酒作りに感心しつつ、酒の土産を片手に去り、その後豊科インター近くの白鳥飛来地に寄り、シベリアの繁殖地へ向け旅立とうと、訓練飛行を繰り返す一〇〇〇羽ほどの白鳥に思いをはせながら帰路にきました。

酒は百薬の長と申します。こうして心身共にリフレッシュ出来る集りは、今では、三〇人近くの大家族となり益々の発展を願っています。

【写真説明】

- ① 12月―「御逢詞^{ホアキシ}単」にて忘年会
- ② 2月―白馬八方咲花ゲレンデにて
- ③ 3月―網干会長を迎え「ならのは」にて

手踊り同好会

毛利 公子

平城ニュータウン文化協会の仲間に入れていただいて九年目を迎えました。「層富第二十号」記念号の原稿と伺い、私が文化協会に入会してからの、層富を出してきて、懐かしく読みかえしております。発足当初、文化祭にカラオケ手踊りで「みだれ髪」を踊らせていただいた事を思い出しています。当時は第二団地の集会所で開催されていきましたね。ずっと文化協会を、支えてきてくださった皆様に敬意を表し、心から御礼申し上げます。

足の不自由な方、病院のベットの上、車椅子でも、好きな歌に合わせて上半身で踊れる手踊り、楽しみながら老化防止にと、がんばっております。メンバーが少なくても、本当に細々と続けておりますが、踊りの話、和服の話とおしゃべりは尽きず、毎月二回のお稽古は楽しんでます。「赤とんぼ」、「まりと殿様」、「雨降のお月さん」、「まつの木小唄」、「ボウリングだよ人生は」、「明日があるさ」、「おてもやん」、「奴さん」等の手踊りと平行して、演歌、民謡、小唄等を練習してきました。

今年も、手踊りで「ちゃっきり節」をお稽古しています。日本舞踊の基本がマスターできればと、小唄「白扇の」、扇の扱い方など、一から練習中です。

踊りや、和服に興味のある方、いっしょに楽しみましょう。是非、のぞいてみて下さい。お待ちしております。

押し花を楽しむ会

杉山 安枝

私と押し花の出会いは、三年前の文化祭の出来事です。会場に入るなり私の目に飛びこんで来た。

色鮮やかな押し花の額や小物の色々、目からウロコ。なんてすばらしい作品。感動しました。

趣味の世界を広げるため、さっそく押し花の前におられた係の方にたずね。文化祭が終ると同時に入会させてもらいました。やさしい先生のご指導の許、押し花の講義から教えてもらいました。

もともと花の大好きな私、ますます花作りにも精が出ます。種からまいて咲いた花、我が家で咲いた花が作品になると、たとえ様のないうれしさで一杯です。



第一木曜クラスの皆さん



第四水曜クラスの皆さん

押し花には、いくつもの過程での楽しみがあります。

一つ目は、道端で咲いている雑草、草花を見つけた時

二つ目は、この花なんて名前だろう。分からない時は、家に帰って花の本とにらめっこ。

三つ目は、つんで来た花を押し花にする時。

四つ目は、押し花が乾燥して出来上って、乾燥シート

に入れる時。色鮮やかに出来上り感激。

五つ目は、その押し花を作品に作る時。ハガキや年賀

状に、その一輪の花をつけるだけでものの見事に変身。

押し花があるだけで心がなごみます。

教室で作品を作っている時、床に一片の花がおちても、

しらずしらずのうちに愛着を感じ、拾い集めます。

教室での友達の輪。花を通じての優しさと他人に対する

心づかいが、つちかわれて来ているのが感じられます。

家族もいつのまにか、花に興味を持ち、庭の片隅に咲い

ている花でも押し花にと、持って来てくれます。小さな

草花一本にも四季折々に咲く自然の美しさに、皆様も心

を動かしてほしいと思います。

みどり多い自然に接し、地域環境に恵まれた中で、押

し花を楽しむ事が出来るしあわせ。

平城ニュータウンに移り住んで、つくづく良かったと感謝致しております。

絵画の会

梶野 哲

昨年十一月に足首骨折の怪我をしてから、全治せず、欠席してしまいましたので、皆様には大へんご迷惑をお掛けしました。この間、私が創立会員で、会長の新創美術協会という美術作品の公募団体が、京都市美術館で第39回展を開催するための準備や、運営委員や事務局を担当している日本芸術会議傘下の日本美術教育学会の仕事も、出来ませんでしたので、いっぺんに多忙になりました。

その様な訳で、この六月の「新水彩画技法講習会」を終了した時点で「絵画の会」講師退任を決議しました。

「絵画の会」は私が創設しましたが、当時は本職もありましたし、文化協会以外にも、スポーツ協会などの同好会の設立の準備も沢山かかえていました。従って、同じ新創美術協会の会員になっていただいていた寛先生に、「絵画の会」の講師をお願いしました。その間、今日の



基礎を作って下さった訳です。その後、先生が滋賀県に転居された時に、引き継がせていただいた次第です。

その時には、会員の皆様はそれぞれ立派な画家としてすばらしい作品を毎年文化祭に出品されてきました。そういう訳で、私としては、特別にご指導する必要もなく、皆様と一緒に机を並べ、時には戸外に出て写生会をするなど楽しく過ごしていただきました。「この会に入会しても、だれも何も教えてくれないから、他の講座やクラブに行った方が良いでしょう」と言われた方もあったのですが、美術大学の受験予備校や職業訓練校以外で美術の専門学校や美術大学でも、初歩的な技術は別で、けれど、美術の一番大切な本質といわれるような事は、先輩作家の作品を鑑賞して、自学自修で体得するものなのです。そして、この会の皆様も、そうされて来られたと思います。そういう訳で優れた会を作られました。

私は、今後は、平城西公民館での「子ども絵画造形教室」を、新創美術協会々員の上田善次先生と協力して、指導していくことと、時に一定期間を限って「初歩の絵画造形講座」などを開催したいと考えています。また、一会員としては、時々は一緒に絵を描くこともあろう

かと思いますが、当分は無理かも知れません。今日まで皆様のご厚情には心より感謝申し上げますとともに、この「絵画の会」のますますのご発展と、皆様方のご健勝と画業の大成について、大慶に存ずる次第でございます。尚、文化祭には出品しますので宜しく願います。

書道講座

田室 西崖

「言の葉ミュージアム」見学記

先日、私の所属する書道の会の研修ツアーの下見を兼ねて、昨年開館したばかりの徳島県立文学書道美術館に行きました。

近年各地に公立の書道美術館も増えています。だが国立はもとより、都道府県レベルの自治体が直接運営する書道美術館はこれまで皆無で、徳島県は全国に先駆けて開設したことになります。もともと近世の貫名松翁ぬきなまつこうと言う傑出した書人を送り出した土地柄で、明治の書道改革で重要な役割をした中林梧竹なまばやしちくの作品を、大量に県が保

有するといった背景もありましたが、その程度の条件に恵まれた自治体は、私たちの奈良県をはじめ枚挙にいとまなく、今回の開館は関係者の努力の賜物というべきです。実際、一九九五年から本格化した徳島の書道美術館建設促進運動では、県内の書道関係のすべての結社が一丸となって署名活動を展開し、県内から八万人、県外からも四万人の署名を集めたといわれ、この一事をとっても並大抵の熱意ではできないことと思われまます。

「言の葉ミュージアム」と銘打った美術館ですが、徳島の地に根ざした文学と書道の資料や作品を集め、その魅力を紹介し、長い年月の中で伝え継がれてきた言葉と心との出会いを、新しい自己の啓発へ繋げて行こうとするこの試みは、多くの人に共感の輪を広げてゆくだろうと思います。

一階は特別企画展や書道に関する個人・団体が自由に利用できる展示会場となっており、天井がかなり高く明るく開放的な雰囲気、適当な広さの特別展示室とギャラリーという設定です。

二階には、書道実習のできる流しを設けた実習室と講座室、文学、書道に関する書籍を開架した図書閲覧室が

あり、映像をみるAVコーナーや、館の収蔵資料の情報検索コーナーも設置されています。

三階には、書道常設展示室と徳島市出身の瀬戸内寂聴記念室、文学常設展示室があります。書道常設展示室には柴野栗山、貫名松翁、中林梧竹、小坂奇石など、近世以降の徳島ゆかりの書家の作品や、小坂奇石の書斎の再現が見られます。

文学常設展示室には、賀川豊彦、生田花世、悦田喜和雄、海野十三、貴司山治、野上彰、富士正晴、北條民雄、森内俊雄など徳島ゆかりの個性的な文学者とその作品、徳島を描いた司馬遼太郎、井伏鱒二、宇野千代、林芙美子、宮尾登美子、吉川英治などの文学作品や、徳島文学の歴史など、紹介しています。

この日、一階のギャラリーでは「翠書道展」が催されていました。私は出陳された作品群に、久しぶりに大きな感銘を覚えました。玄関ピロティを左に折れると扉のないギャラリーの入口があり、その入口を通して見える正面の壁面に巨大な文字のタピストリーを見つけ、私は思わず「あ」と声を洩らし、室内に飛び込みました。約五メートル四方の厚手の白布に巨大な「雪月花」の三文

字が踊っていました。書者は吉村清志氏、巨大な文字にも拘らず、生き生きと躍動する筆力は確かで、修練の蓄積を充分に感じさせるものでした。その他九名のメンバーの作品は、漢字・かな・現代書の、額・パネル・布製の巨大条幅、色紙、番傘など、さまざまに趣向を凝らして、いずれの作品も見応えのある筆致を展開していました。日展をはじめ、既成の全国展には見られぬ鮮やかな創造の世界がそこにはあり、並々ならぬ意欲と気迫に満ちていました。

一体どのようなグループなのか。

受付に置かれた飾り気のない趣意書に眼を通して、はじめて私は鮮烈な感動の源に思い至り、納得できたように思います。彼らは四国大学書道コースの卒業生であり、卒業後ほとんどの学生が本意ながら書から離れてゆくこと、折角学んだ書道の楽しさを今後生かして行こうとこの展覧会を企画したことなどが訥々と記されています。

自由に書の創作活動ができる経済的背景が、現在の日本の状況には希薄であることに憤りを覚えながらも、彼らの前向きの姿勢と、この文学書道館を支えた多くの徳

島県の人々に喝采を送りたい衝動に駆られながら、満ち足りた気持ちで阿波の街をあとにしたのでした。

先史学講座

奥村 國男

毎月第三月曜日の午後に行われている、奈良大学の泉拓良教授を講師とする「先史学講座」に参加して早くも三年になります。

歴史にうとい者の例にそむかず、先史学の何たるかを解さないままの入会でした。いまだに他の先輩の皆さんに後れないように、何とか先生の話を理解しようと、老脳に鞭打って頑張っているわが現状です。

先年より問題になっている関東以北の「前中期旧石器時代遺跡捏造事件」のような不祥事が起きるのも、先史時代という、新旧石器時代から縄文・弥生時代まで、何万年という長い年月のなかで、文献的資料の全然ない時代の研究なればこそという思いもします。もっともこの問題も近いうちに最終報告が行われるとか……。

まあこんな暗い話よりもっと明るく、また、感銘を受

けた話をしましょう。

それは、去る平成十四年十月十九日付の「日本経済新聞」に掲載された、

『日本の技術が遺跡を守った』

という記事のことです。

その内容は、本講座を担当していただいている泉拓良奈良大学教授を団長とする「レバノン遺跡調査団」の輝やく業績に対して、レバノン当局が謝意を表明したというものです。

過去の内戦や、イスラエルとの紛争による荒廃からの復興が進むレバノン南部の高速道路建設に関連しておこなわれた「古代都市のティロス遺跡」（世界文化遺産に登録されている）の未発見の遺跡の発掘調査を担当された本調査団が、日本の最先端技術を駆使し、その成果を同国の「開発・復興会議」に報告された結果、インターチェンジの建設地変更など、ルート見直しが正式に決定し、レバノン当局から「貴重な遺跡の保存と国土開発が両立できた」と大いに感謝されたということです。

泉先生はじめ関係者の長期に亘る多大の労苦とその輝かしい業績に、あらためて敬意と祝意を表わしたいと思

います。

さて、わが教室の便りです。

泉先生のご結婚をお祝いしての乾杯に始まった平成十四年春には、例によって、先生みずから、パソコンやプロジェクターなどの器械一式をぶら下げての「マルタ島の遺跡調査」のスライドショーを見ながらの説明を受け、校務・出張と極めて多忙な中の貴重な時間を割いての縄文を研究する講義がいよいよ始まりました。

「縄文の土器研究」からです。縄文の土器研究史の概説、明治・大正・昭和に亘る全国各地における研究者の業績や流れの話などなど。

六月になって、「縄文土器の編年」に進みました。

☆ 縄文章創期Ⅱ 隆起線文土器・石斧せきぼ

（一万三千年～一万年前）

有茎尖頭器などの出土

（奈良県山添村北野ウチカタビロ遺跡・桐山和

田遺跡）

☆ 縄文早期Ⅱ 押型文土器

（二万年～六千年前）

（大川式・神宮寺式など）

(奈良県山添村大川遺跡など)

まで講義が進んできました。この間にも、前述の「レバノン遺跡調査団」の活動状況や、遺跡のスライドショーも、二回実施していただきました。

今年になって「土器による編年」も、いよいよ縄文前期から縄文中期、縄文後期と進み、更に縄文晩期ということになり、やがて「弥生時代」の前期(二、五〇〇年程前、ご存じの田原本町「唐古・鍵遺跡」などの時代)に入る訳で、どのようなお話が聞けるか楽しみにしている次第です。少しでも興味をお持ちの方は今からでも入会して聴講して下さい。

最後になりましたが、今年も泉先生は極めてご多忙の様子、われわれ受講生に比べ、お若いとはいえ、健康には、十分ご留意のうえ末永くご指導を願えればと、心より念じ拙文を閉じたいと思います。

『續日本紀』を読む会

渡辺 馨

故鬼頭清明先生の教導の下にはじまった「古代史講座」を継いで、『續日本紀』を読む会」として再生したこのグループは、「平城ニュータウン文化協会」の二十年と歩みを同じくして、生き生きと活動している。

このグループが東洋文庫の『續日本紀』を読みはじめたのは、『層富』十三号所載の「グループ便り」によれば一九九一年秋からのことだそうで、「最初にいただいたコピーの資料が拡大コピーの大きな字になっていて、それだけでとっつきやすい気持になりました。」と書かれています。私が受講者に加わった一九九七年四月に貰ったコピーのテキストは、巻第六の一四八頁、和銅六年(七二三年)からであった。それからすると、私のこの講座での『續日本紀』の読み初めは和銅六年五月二五日で、「始めて、山背国に命じて、乳牛を飼う戸、五十戸を指定させた。」というところから入ったわけで、爾来ほぼ満五年を経過したことになる。

鬼頭先生の急逝によって、いったん「古代史講座」の

幕を降ろし、改めて、『續日本紀』を読む会」として再
出発してもう三年目になる。光陰箭の如しの感が深い。

東洋文庫版の『續日本紀』を読み初めて十三年目に入
った今年は、第二十四巻の六月三日の孝謙太上天皇によ
る「宣命」(第二十七番目の詔)から始まったが、この
巻第二十四から、われわれは『續日本紀』の読み進み方
を軌道修正し、東洋文庫版の口語訳の『續日本紀』から
岩波書店版の『新日本古典文学大系』のなかの『續日本
紀』の「訓み下し文」をテキストとして読むことになっ
た。

全四十巻の大著である『續日本紀』のテキストを、そ
の半ば過ぎの二十四巻目に至って改めることを私が提案
した折に、グループのほとんどの人々にすんなり賛成し
て貰ったのは正直少し驚きであった。というのは東洋
文庫版の「口語訳」は読み易く、『續日本紀』にはどん
なことか書かれているのかを先ず知りたいと思って取組
むわれわれ愛好家にとっては、適量の注も付されていて
格好の入門書といえるものであった。とはいえ、数年来
読み馴染んでくるにつれて、ある種の物足りなさを覚え
るようになっていたことも確かである。それは古代史の

古典として『古事記』、『日本書紀』および『万葉集』を
繙く限り、「口語」や「現代語訳」で読むだけでなく、
一挙に「原文」とまではゆかなくとも、「訓み下し文」
で読み、補注も、もう少し詳しいものに触れたいとい
うことからである。『續日本紀』に関して、これらの条件
を満たしている市販書として挙げられるのは、前記の岩
波版の『續日本紀』であった。古くからのグループの人
達はもちろん新しく加わってくる人達も、「口語訳」の
『續日本紀』については講談社学術文庫版の『續日本紀』
(宇治谷孟、上中下三巻本)も市販されて、入手し易く
なっていることから、より詳しいものに触れたいとい
う思いがあったのことに視察できる。

このようにして、われわれのグループ(五月現在二十
名)は、新しいテキストによって、巻第二十五(七六四
年・天平宝字八年)の「訓み下し文」を読み進み、付さ
れた「脚注」、「補注」を活用しながら、今までのよう
なワイワイ、ガヤガヤの楽しい雰囲気の中かで理解と親交
が深められてゆくことと思っている。

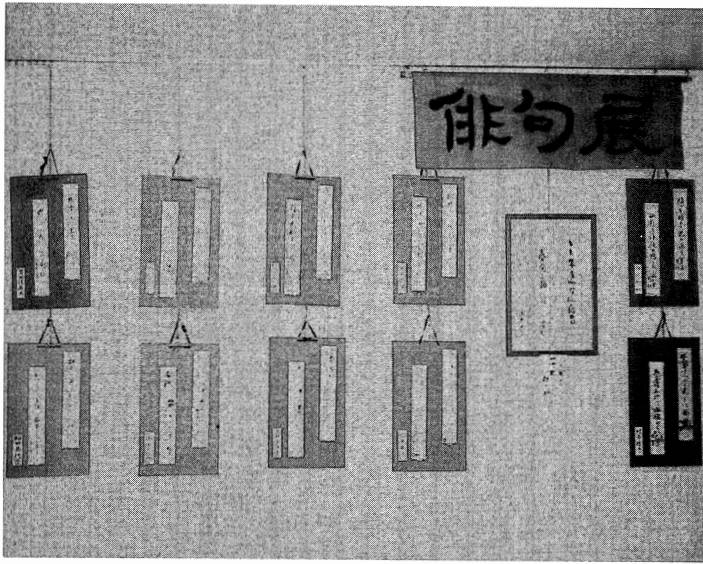
観月の夕べ

(十六夜)

(14:9:23)



第二十回 文化祭 記録



展示の部

◎前期 十月二十五日(土) ～ 十月二十七日(日)

◆俳句 牧野 和代 伊藤 柳紅 上田 善次

上田千代子 岡 良子 込山 山歩

周藤 智子 多田 文子 辻田しま代

南村 照栄 西山たまみ 西山佐代子

藤澤 陽子 堀池 敏子 森田 陽子

和田美代子 吉田佳寿子 村上 俊子

麻生 利子

◆写真 赤坐 右一 伊藤 昌一 伊藤 嶺里

大迫くき枝 皆藤 甫 菊地 俊一

北側 勝 北原 吉雄 志智 英子

田中 利忠 寺嶋りくお 西口 義朗

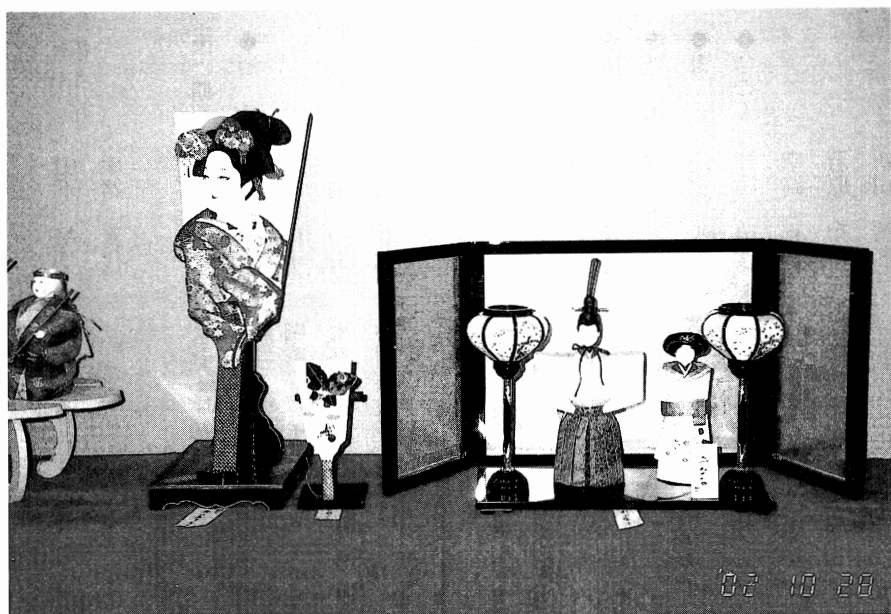
野原 雅子

◆軸装 西島 芳子 石井 英治 岩坪 昇

西村 従子 水野 繁三 山本 康彦

大迫くき枝

◆押し花 広崎 光子 伊藤 京子 井戸八穂子



◎中期 十月二十八日(月)～十月三十日(水)

◆絵画 梶野 哲 石川 和子 上田 善次

宇野木久代 岡島 恒子 奥谷 敏子
 木村 絢子 鈴木 幸子 杉山 安枝
 住吉 紀子 榊 鈴子 南村 照栄
 西山佐代子 西田 安代 野原 雅子
 西本万優美 久本 美鈴 袋井 妙子
 松村せつ子 御手洗敦子 山中優美子
 若原 和子

◆銅板 込山 博介 稲田 善彦 皆藤るみ子
 山田 晴美 山田ツル子 伊東 勝巳
 西村 通弘 広田 省吾 山崎 明
 北嶋 輝夫 高橋ゆかり 南村 勝次
 大台 雅生 小西 淑彦 込山 嘉代

◆木目込人形 レリーフ 中村 一郎 山崎 明 山田 正
 谷口 直子 網千佐和子 石森千代子
 奥村 淳子 北 アサ子 島田 守恵

押絵 杉田 瓊子 杉山 安枝 長柄 清子

東山 幹子 御手洗敦子 森本 登子
 山下 彰子 鷺塚 順子 西田 昌子
 幸路 喜代

◎後期 十一月一日(金)～十一月三日(日)

◆短歌 網干 善教 荒居 智子 石井 光子

大浦小枝子 岡田 越子 柏原 英一

片桐 一夫 木庭 和子 玉置 小代

寺嶋 勳雄 中川都哉子 馬場 恭子

松村せつ子 森田 陽子 安田 和子

◆篇作りの会 赤井美津子 秋山 静 新司 輝江

櫛原千鶴子 岡田 越子 幸路 喜代

杉山 啓子 若原 和子

◆園芸 北村 孫衛

◆地酒 写真・日本酒ラベル

◆書 田室 西崖

◆パッチワーク 打田 照子 櫛原千鶴子 井本 市子

幸路 喜代 鈴木 幸子 吉川 普子

若原 和子 菅 千尋 住吉 紀子

新司 輝江 堀部 澄枝 坂口 みさ

上演の部

◎日時 二〇〇二年十一月四日(祝)午後一時～四時

◎会場 北部出張所会議室

◎主催 平城ニュータウン文化協会

上演 一三時〇〇分 挨拶 文化協会会長 網干 善教

来賓挨拶

1) 箏曲 一三時五分 菊地雅千絵教室

「木陰」／松本 雅夫作曲

第1箏 南湖雅千紗・吉本 康子

第2箏 比良 尚美

「日本のわらべ唄」／野村 正峰編曲

第1箏 比良 尚美・吉本 康子

第2箏 南湖雅千紗

2) 詩吟 一三時三〇分 詩吟の会

コンダクター 西尾 弘子

吟題 作者 吟詠者

九月十三夜 上杉 謙信 独吟) 宗徳 郁雄

白帝城	李白	独吟	小西シゲ子
名槍日本号	松口 月城	独吟	堀部 澄枝
出郷作	佐野竹之助	独吟	増井 公道
稗搗の歌	松口 月城		
	合吟	小西シゲ子・山本すま子	
	西脇 岑子・岩井 静栄		
獄中作	花田 克子・山道 慶子		
大楠公	橋本 左内	独吟	周藤 吉雄
古城	徳川 景山	独吟	西村 諄輔
	連吟	高木紫司江	
	花田 清美		
本能寺	頼 山陽		
	連吟	西尾 弘子・香川サワノ	
	堀部 澄枝・高木紫司江		
	増井 公道・西村 諄輔		
	周藤 吉雄・杉田 英二		
	花田 清美・宗徳 郁雄		



3) ギター演奏 一四時 中村 昭三と国武 三恵

曲目

千鳥による変奏曲

ここに幸あり

ホタ・アラゴネーサ

ジェラシー

春よ来い

3) Yesterday Once More

橋本 友子

阪口 みさ・川端和加子・村上 寛子

熊田てる子・福井 和子・高松三枝子

谷口 道子・山内 梅乃・西尾 弘子

堀部 澄枝・堀田 幸子・鈴木 和子

鈴木 時子

4) 舞踊 一四時三〇分 手踊り同好会

手踊り「奴さん」

毛利 公子・小森美恵子

島川恵美子・山内 梅乃

歌謡舞踊「佐渡の恋唄」久門 富美

「みだれ髪」 島川恵美子

大和楽「萩と月」 山内 梅乃

長唄「千代と寿」 毛利 公子（飛鳥華蓉）

6) フォークダンス 一五時二〇分 フォークダンスの会

曲目

1) ワシントン広場の夜は更けて（アメリカ）

ダブルサークル

2) セント・マイ・ブラウン・ジャグ（アメリカ）

シングルサークル

3) ランカシア・リール（イギリス）

ダブルサークル

4) ダンシング・イン・ザ・ストリート

（アメリカ・ラウンドダンス）

ダブルサークル

5) 英語で歌いましょう 一五時 初級英語講座

曲目

1) Edelweiss

2) You Are My Sunshine

5) 知床旅情（レクリエーションダンス）

ダブルサークル

宮川恵美子

玉置 小代・片岡 圭子・松村せつ子

橙 公栄・宮崎 滋子・松田 輝子

村上 陽子・木庭 和子・打田 照子

馬場 恭子・若原 和子・住吉 紀子



2003 (平成15) 年度

第21回

平城ニュータウン文化協会総会

日 時 2003年5月18日 (日)

受付 PM 1:00

開会 PM 1:30

場 所 北部出張所会議室

I 開会の辞

II 会長挨拶

III 来賓祝辞

IV 議長選出

V 議 事

(1) 2002年度事業報告

(2) 2002年度会計報告・監査報告

(3) 役員改選

(4) 2003年度事業計画

(5) 2003年度予算

(6) その他

VI 閉会の辞

第21回総会 記念講演

午後 2:30から

『最近飛鳥で出土した暦の木簡』

講師 関西大学名誉教授

網 干 善 教 氏

懇 親 会

午後 4:00から



2002年度事業報告

創立20年の節目の年、文化協会の講座・同好会も29あまりになり、会員諸氏の生活の一部となるまでに定着してきたことは、喜ばしいことです。その反面会場不足が悩みの種となっていました。このほど念願の「地区センター」(仮称)建設の運びとなりました。これは自治連合会・諸団体諸氏と一緒に「街づくり」の方針のなかで推進実現されました。

会誌『層富』19号発行1回、ニュースは隔月一回、臨時号1回の計7回発行することが出来ました。また、協会報は秋1回の発行のみとなり今後の課題となりました。

印刷は経費節約のため、ニュースは協会のコピー機で、協会報はスポーツ協会の印刷機をお借りして、手作りの作業となりました。

協会報の配布は自治会各位のご協力により、無事各戸に配布されましたこと感謝申し上げます。

総会の記念講演、文化祭記念講演には会場一杯の盛況でした。

セミナーの開催も好評を博しました。

文化祭は10月24日～30日・11月1日～3日展示の部、11月4日上演の部が盛大に開かれました。

観月の夕べでは風流を楽しむ会員の笑顔に網干先生の即席の朗詠など満月にふさわしい宴となりました。

2002年 4月1日	ニュース1号発行
5月19日	第20回(2002年度)総会 記念講演『高松塚30年』 講師 網干 善教先生
6月1日	ニュース2号発行
9日	夏期セミナー 「かくれキリシタンと祭祀組織」 講師 野崎 清孝先生(奈良大学名誉教授)
7月6日	地区センター建設促進委員会
9月7日	常任理事会
11日	ニュース3号発行
19日	文化祭展示部打ち合わせ会
20日	『層富』発行
23日	観月の会
10月1日	ニュース4号発行
15日	協会報発行 全戸配布
10月24日～30日	11月1日～3日 文化祭展示の部開催
25日～27日	前期展示の部 俳句、写真、押し花、表装
28日～30日	中期展示の部 絵画、銅板レリーフ、木目込み人形・押し絵
11月1日～3日	後期展示の部 短歌、宮作りの会、園芸、パッチワーク 地酒の会、書
11月4日	文化祭上演の部開催 文化祭記念講演 「東大寺の考古学」 講師 平松 良雄先生(奈良県教育委員会)
4日	上演の部 詩吟、舞踊、箏曲、ギター演奏、フォークダンス、英語講座
4日	ごくろうさん会
12月1日	ニュース5号発行
12月21日	地区センター建設促進委員会
2003年 1月1日	ニュース6号発行
13日	右京・神功「新春を祝う会」参加
14日	朱雀・左京「新春を祝う会」参加
17日	地区センター安全祈願祭
2月1日	ニュース7号発行
3月22日	常任理事会

2002年（平成14年）度決算報告

平成14年4月1日～平成15年3月31日

【収入の部】

(単位、円)

項目	予算	実績	増減	備考
前年度繰越金	123,103	123,103	0	
会費	570,000	540,000	△ 30,000	@1,500×360人
後援費	70,000	70,000	0	各自治連合会、自治会
寄付金	10,000	33,000	23,000	講師お礼戻り
雑収入	897	1,820	923	銀行利息 他
合計	774,000	767,923	△ 6,077	

【支出の部】

項目	予算	実績	増減	備考
事業費	70,000	51,889	△ 18,111	文化祭、セミナー
助成金	84,000	78,000	△ 6,000	講座、同好会 3,000×26
会議費	10,000	1,603	△ 8,397	会議、資料、他
広報費	400,000	334,600	△ 65,400	会誌、会報、ニュース
事務費	20,000	9,204	△ 10,796	事務用品、他
印刷、消耗費	80,000	78,750	△ 1,250	コピー機消耗品
通信費	4,000	1,890	△ 2,110	郵送料
渉外費	10,000	13,170	3,170	協賛費
雑費	10,000	5,191	△ 4,809	項目にない出費
予備費	6,000	0	△ 6,000	
積立金	80,000	80,000	0	特別会計繰り入れ
小計	774,000	654,297	△119,703	
次期繰越金		113,626	113,626	
合計	774,000	767,923	6,077	

特別会計 南都銀行スーパー定期15年3月31日(月)現在 ￥335,384

備品 コピー機一台 LEODRY2540

14年度 会計監査報告

会計帳簿、証票類他、関係書類等を精査した結果、適正であったことを認めます。

監事 東 叡 (印)
西 村 美佐子 (印)

2003年度事業計画

はじめに

当「協会」は、地域での日常的な文化活動を通して、地域コミュニティー・住民の親睦と和を実現していくために、当時の自治会・連合会の「街づくり」の方針のなかで結成推進されてきたものです。

この設立趣旨にそって、地域住民の多くの方の、参画を期するとともに、会員の研究創作発表、相互の交流などの場としつつ、地域文化の発展に、寄与することを基本としていきます。

また地域四自治連合会をはじめ、スポーツ協会、教育懇談会、地区社会福祉協議会などの各団体の活動とも連携して、ひきつづき「街づくり」に貢献していきます。

おもな計画

- 1 講演会の開催
総会記念講演
文化祭記念講演
- 2 セミナーの開催
- 3 会誌『層富』の発行
- 4 会報の発行（全戸配布）
文化協会案内号
文化祭 案内号
- 5 ニュースの発行（隔月発行予定）
- 6 大和路見学会
春1回
秋1回
- 7 文化祭の開催
- 8 観月の夕べの開催
- 9 年間を通じて趣味の講座開催
- 10 その他

会の発展を期しての工夫など会員各位の、提案、役員会決定などにもとづき適宜事業を推進したい。

2003年（平成15年）度予算

【収入の部】

（単位、円）

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	113,626	
会費	540,000	@1,500×360人
後援費	70,000	各自治連合会、自治会より
寄付金	10,000	
雑収入	374	銀行利息他
合 計	734,000	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
事業費	70,000	文化祭、セミナー他
助成金	78,000	講座、同好会の助成 @3,000×28
会議費	10,000	会議、資料、他
広報費	380,000	会誌、会報、ニュース他
事務費	20,000	事務用品
印刷、消耗品費	80,000	印刷機器消耗品、コピー
通信費	4,000	郵送料、電話代
渉外費	10,000	協賛費等
雑費	10,000	各項目に該当しない必要経費
予備費	12,000	
積立費	60,000	コピー機積立費
合 計	734,000	

講 座 ・ 同 好 会 一 覧

	定期講座・同好会	担 当 者	☎71局	曜 日 ・ 時 間	予定会場
1	歴史教養講座	網 干 善 教	6510	第2火曜日(10時～12時)	北部出張所会議室
2	万葉講座	松 岡 禮 一	2964	第1月曜日(13時半～15時半)	北部出張所会議室
3	先史学講座	泉 拓 良 問合せ 山内梅乃	1654	第3月曜日(15時～16時半)	北部出張所会議室
4	書道講座	田 室 西 崖	7035	第3月曜日(13時～15時)	北部出張所会議室
5	読 書 会	問合せ 山内梅乃	1654	第4金曜日(10時～12時)	北部出張所会議室
6	フランス語講座	休 講			
7	英語初級講座	橋 本 友 子	0395	毎月曜日(9時半～10時半)	北部出張所会議室
8	英語中級講座	橋 本 友 子	0395	毎月曜日(10時半～11時半)	北部出張所会議室
9	中国語同好会	松 村 如 洋	9605	毎木曜日(9時半～11時半)	北部出張所会議室
10	俳句入門 (平城山句会)	牧 野 和 代 問合せ 込山博介	1777 5058	第3木曜日(13時～16時)	平 城 院
11	短歌を楽しむ会	網 干 善 教 問合せ 木庭和子	6510 3494	第3火曜日(13時半～16時)	北部出張所会議室
12	絵 画 の 会	大 野 貞 男 問合せ 上田善次	3295 72-2539	第1・3・4火曜日(10時～12時)	北部出張所会議室 神功集会所
13	写 真 同 好 会	赤 坐 右 一	0111	概ね月2回日曜日、ニュースで通報	野 外
14	山 歩 きの 会	西 幹 友 雄	6102	第2土曜日(雨天中止の場合は第3土曜)	野 外
15	… … 歩 く 会	広 田 省 吾	0207	奇数月第3金曜日偶数月第4日曜日	野 外
16	園 芸 の 会	北 村 孫 衛	0823	第4木曜日(13時～16時)	右京4-7-5
17	野草をしらべる会	休 講			
18	拓本を楽しむ会			自主活動 問合せ 事務局まで	
19	詩 吟 の 会	吉本音市・西尾弘子 問合せ 花田清美	5036 2787	第1・2・3水曜日(10時～11時半) (13時半～15時)	北部出張所会議室
20	手踊り同好会	毛 利 公 子	1989	第1・2金曜日(10時～12時)	北部出張所会議室
21	押し花を楽しむ会	廣 崎 光 子	0774-73- 0702	第1木曜日(10時～16時) 第4水曜日(10時～16時)	北部出張所会議室
22	表 装 の 会	西 島 芳 子	72-0335	第2・4木曜日(10時～17時)	北部出張所会議室
23	料理を楽しむ会	松 村 せ っ 子	9605	第3木曜日(10時～12時)	平城東公民館
24	銅板レリーフ同好会	山 崎 明 問合せ 皆藤るみ子	43-3326 2960	第1・3金曜日(13時半～16時)	平城西公民館
25	パッチワーク研究会	打 田 照 子	2879	第2・4金曜日(13時～16時)	北部出張所会議室
26	宮 作 り の 会	問合せ 堂下美智子	2383	第2・4月曜日(10～16時)	北部出張所会議室
27	木目込人形・押絵同好会	谷 口 直 子 問合せ 石森千代子	3183	第1・第3水曜日(10時～14時)	北部出張所会議室
28	地酒を味わう会	松 本 敏 夫 問合せ 鈴木昭弘	1690	第2土曜日(18時半～)	会 場 不 定
29	フォークダンスの会	宮 川 恵 美 子 問合せ 玉置小代・片岡圭子	0066・3128	第1火曜日(13時半～16時) 第3木曜日(13時半～16時)	北部出張所会議室
30	「續日本紀」を読む会	渡 辺 馨	72-4855	第4火曜日(13時半～15時半)	北部出張所会議室

会 則

第一章 総 則

第一条 この協会は、平城ニュータウン文化協会と
いう。

第二条 事務局は、平城西公民館に置く。

第二章 目的及び事業

第三条 会員の研究・創作発表、知識の交換並びに
会員相互間及び他の文化団体との連絡提携
の場となり、総合文化に関する進歩普及を
はかり、地域文化の発展に寄与することを
目的とする。

第四条 前条の目的を達成するために、次の事業を
行う。

- 1 講演会・研修会・展覧会・発表会・文
化講座等の開催。

- 2 関連文化団体との連携及び協力。

- 3 研究の奨励及び研究業績の表彰。

- 4 会誌の発行。
- 5 その他目的を達成するために必要な事
業。

第三章 会 員

第五条 平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、
協会の目的に賛同する者とする。会員の種
別は次のとおりとする。

- 1 正会員 年間会費一、五〇〇円

但し、高校生五〇〇円

- 2 賛助会員 この協会の趣旨に賛同する
者で年間会費五、〇〇〇円以上納める
個人又は団体とする。

- 二、会員の更新手続きは不用とするが会費
は総会後三ヶ月以内に納入のこと。但
し、二年間会費納入なき場合は退会と
見做す。

第四章 役 員

第六条 協会にはつぎの役員を置く。

会長一名、副会長三名、常任理事若干名、
事務局長一名、事務局次長一名、会計一名、

理事若干名、監事二名。

第七條 理事は、正会員中より選出する。

二、会長、副会長、常任理事は理事の互選

で定め総会の承認を得る。

三、事務局長、事務局次長、会計は理事中より会長がこれを選任し、総会の承認を得る。

四、監事は会員中より二名選出する。

第八條 会長は協会を代表する。

二、副会長は会長を補佐し、会長事故ある時は代行する。

三、理事は理事会を組織し、協会に関する事項を審議し執行する。

四、常任理事は理事会の決定に基づき業務遂行に当たるとともに、総会で決議した事項を執行する。

五、事務局長は会務の遂行に関する理事会、常任理事会等の決議に基づき全般の事務連絡、処理に当たる。

六、事務局次長は事務局長を補佐する。

七、会計は会計事務を処理する。

八、監事は会計帳簿を監査し、通常総会において報告する。

第九條 顧問・参与を置くことができる。顧問・参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二、顧問・参与は会議に出席して意見を述べることができる。

第十條 役員任期は二年とし、再任は妨げない。

二、補欠より選出された役員任期は、前任者の残任期間とする。

三、役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行う。

第五章 会 議

第十一條 理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、

理事の三分の一以上から会議の目的を示して請求のあったときは、理事会を招集しなければならぬ。

二、理事会の議長は、会長又は会長の指名する者とする。

三、理事会は理事の二分の一以上出席しな

ければ議事を開き議決することができる。
ない。

四、理事会の議事は、出席理事の過半数を
もって決し、可否同数のときは議長が
決す。

第十二条 常任理事会は、会長、副会長、常任理事、
事務局長、会計によって構成し、必要に
応じ会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第十三条 通常総会は毎年一回会長が招集する。
二、臨時総会は、理事会が必要と認めたと
き会長が招集する。

三、総会の議長は総会出席者の中から指名
する。

四、総会の議事は、出席者の過半数をもつ
て決し可否同数のときは議長が決する。

第十四条 次の事項は通常総会に提出して、その承認
を受けなければならない。

- 1 事業報告及び収支決算
- 2 会計監査報告
- 3 事業計画及び収支予算

4 その他理事会において必要と認められた事
項。

第六章 会 計
第十五条 経費は会費並びに補助金、その他の収入に
よる。

第十六条 会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三
月三十一日に終わる。

第七章 会則の変更

第十七条 この会則は、総会の議決を得なければ変更
することができない。

第八章 補 則

第十八条 この会則施行についての細則は、理事会の
議決を得て別に定める。

第十九条 この会則は昭和五十八年二月二十七日から
適用する。

二〇〇三年度
役員名簿

会長	網干善教
副会長	光岡祐彦
事務局長	上田善次
事務局次長	山内梅乃
會計	玉置小代
監事	大浦小枝子
参与	西村美佐子
常任理事	東 東 西 西 西 西 南 田 田 鈴 込 木 北 片 川 口 直 子 勇 西 村 通 弘 西 幹 友 雄 西 島 芳 子 南 村 照 榮 田 室 西 崖 田 中 幸 夫 鈴 木 幸 子 込 山 博 介 木 庭 和 子 北 村 孫 衛 片 岡 圭 子
	赤 坐 右 一 谷 口 直 子 川 口 直 子 東 東 西 西 西 西 南 田 田 鈴 込 木 北 片 石 森 千 代 子 赤 坐 右 一 谷 口 直 子 川 口 直 子 東 東 西 西 西 西 南 田 田 鈴 込 木 北 片 上 中 敏 央 石 森 千 代 子 赤 坐 右 一 谷 口 直 子 川 口 直 子 東 東 西 西 西 西 南 田 田 鈴 込 木 北 片 打 田 照 子 上 中 敏 央 石 森 千 代 子 赤 坐 右 一 谷 口 直 子 川 口 直 子 東 東 西 西 西 西 南 田 田 鈴 込 木 北 片 大 迫 ぐ 枝 打 田 照 子 上 中 敏 央 石 森 千 代 子 赤 坐 右 一 谷 口 直 子 川 口 直 子 東 東 西 西 西 西 南 田 田 鈴 込 木 北 片 岡 田 越 子 大 迫 ぐ 枝 打 田 照 子 上 中 敏 央 石 森 千 代 子 赤 坐 右 一 谷 口 直 子 川 口 直 子 東 東 西 西 西 西 南 田 田 鈴 込 木 北 片 梶 野 哲 岡 田 越 子 大 迫 ぐ 枝 打 田 照 子 上 中 敏 央 石 森 千 代 子 赤 坐 右 一 谷 口 直 子 川 口 直 子 東 東 西 西 西 西 南 田 田 鈴 込 木 北 片

理事	山田綾子
	山下良吉
	宮崎滋子
	濱口光良
	柴田晃良
	北川尚子
	喜多正恵
	河村美智子
	大井政子
	渡辺馨 <small>かおる</small>
	毛利公子
	宮川恵美子